0087

高槻市文化財調査報告書第５冊

安満遺跡発掘調査報告書

—中世集落跡の調査—

1974年

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査報告書第５冊

安満遺跡発掘調査報告書

—中世集落跡の調査—

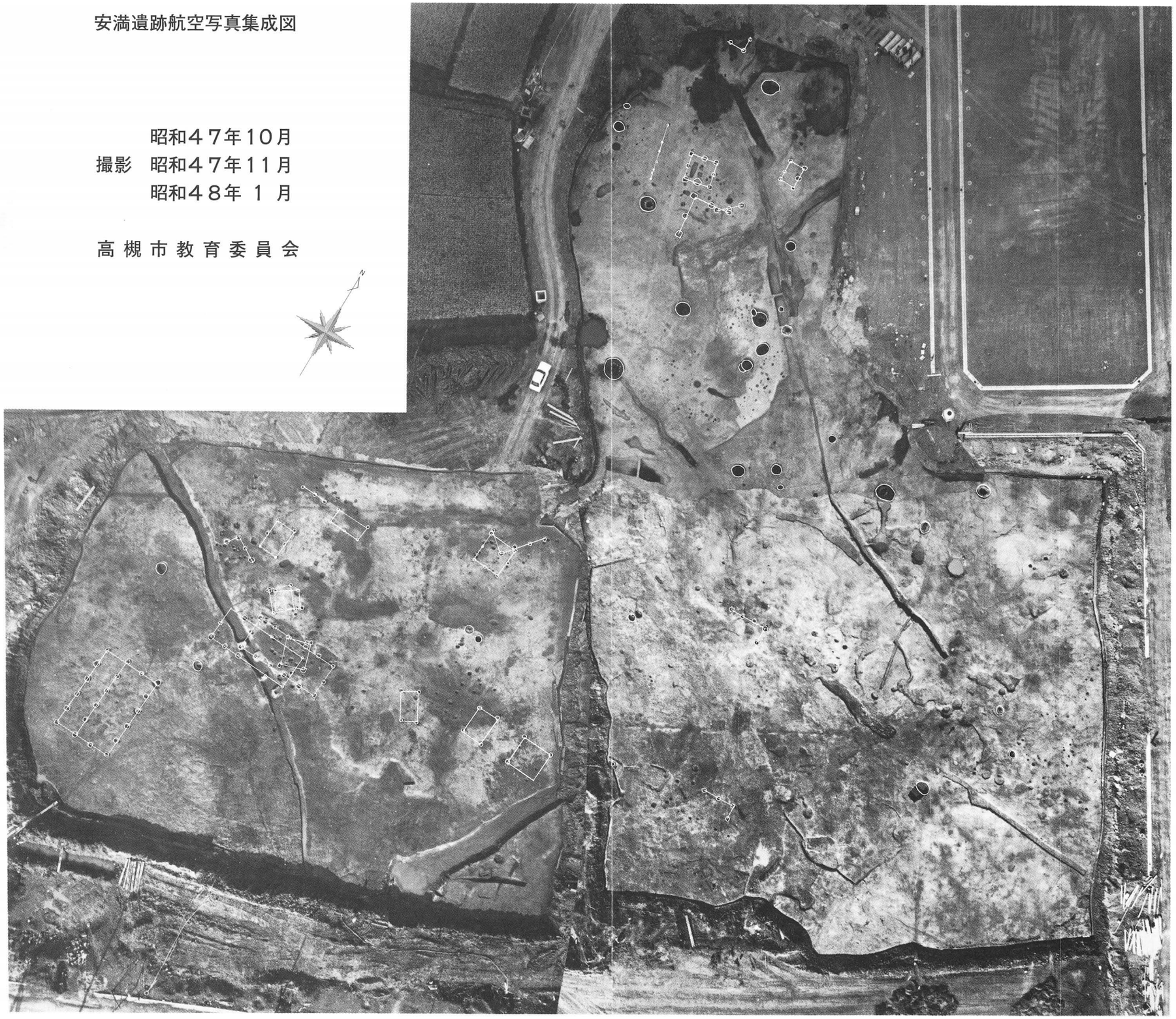
1974年3月

高槻市教育委員会

安満遺跡航空写真集成図

昭和４７年１０月
撮影　昭和４７年１１月
昭和４８年　１　月

高槻市教育委員会



序

本市は弥生時代以降古くから文化の栄えた地であり、わが国の文化歴史等の理解に欠くことのできない文化財が豊富に残されております。これらの貴重な国民的財産である文化財を永く保存し、後世に伝えることは、われわれに課せられた責務であります。とくに最近における大規模な土地開発の激増に対処し、文化財を現状保存していくことは大変困難となってきております。

本市における代表的な弥生時代の安満遺跡も昭和3年に京都大学農学部付属農場建設の際に発見され、その後宅地開発等に先立ち発掘調査を実施してきましたが、その一部は現状保存されております。

ここにまとめた安満遺跡の調査報告は共栄建設株式会社、関西土地建物株式会社により宅地造成工事が実施されることになったため、やむを得ず記録保存することになりましたが、今後は、市民各位のご協力を得て文化財の保護に万全を期する所存であります。

なお、調査および調査報告書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

1974年3月

高槻市教育委員会
教育長　平井正吾

例　　言

1. 本書は高槻市教育委員会が高槻市高垣町における宅地造成工事に先立って発掘調査を実施した安満遺跡の調査報告書である。
2. 調査には、高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏を調査担当者とし、高槻市教育委員会社会教育課橋本久和が従事した。
3. 出土品の整理と本書のまとめは原口正三氏の指導のもとに橋本が担当した。

   なお、本書に掲載した遺物写真は財団法人大阪文化財センター技術員中西和子氏の撮影によるものである。
4. 調査の実施および本書の作成に際し、下記の方々の協力をえた。記して感謝の意を表する。

   田代克己・富井康夫・藤井泰雄・清水重幸・藤松藤太郎・共栄建設株式会社・関西土地建物株式会社
5. 本書に掲載した遺物写真の番号は実測図の番号と同じである。

目　　次

Ⅰ　安満遺跡とその周辺 …… 1

Ⅱ　調査経過 …… 2

Ⅲ　遺　構 …… 5

a　遺跡の層序

b　掘立柱建物

c　井戸

d　溝

e　土壙墓その他の遺構

f　10－D・東1－A地区の遺構

Ⅳ　遺　物 …… 14

a　古式土師器

b　須恵器

c　瓦　器

d　土師器

e　陶磁器

f　瓦

g　木製品

h　石造遺物

i　刀　子

j　土　馬

k　砥　石

Ⅴ　結　語 …… 19

挿図目次

第1図　遺跡の層序 …… 6

第2図　10－D・東1－A地区の遺構 …… 13

第3図　中世の農家（一遍聖絵）…… 25

図版・図面目次

PL. 1. 安満遺跡付近地形図・周辺遺跡分布図
PL. 2. 安満遺跡地区割図
PL. 3. 調査区地区割図
PL. 4. 調査区東側航空写真
PL. 5. 調査区東側遺構平面図
PL. 6. 調査区西側航空写真
PL. 7. 調査区西側遺構平面図
PL. 8. a 東北1－K地区・建物A－2 b 東北1－0地区
PL. 9. a・b 建物B－1・B－2・C－1
PL. 10. a 東側調査区 b 西側調査区
PL. 11. a 東1－H地区土器だまり b 西側調査区
PL. 12. a・b 東1－E・F・I・J地区、建物群、W－A溝
PL. 13. a W－B溝 b 東1－K地区土壙墓群・W－B溝
PL. 14. a 建物A－13 b 井戸29
PL. 15. a 10－D・東1－A地区全景 b 建物B－3
PL. 16. a 井戸2・3 b 井戸9
PL. 17. a 井戸7・8 b 井戸7・8断面
PL. 18. a 井戸4 b 井戸25・26
PL. 19. a 井戸22 b 井戸6
PL. 20. 井戸3平面図・立面図
PL. 21. 井戸7・8平面図・立面図
PL. 22. 井戸9平面図・立面図
PL. 23. 井戸15平面図・立面図
PL. 24. 井戸25平面図・立面図
PL. 25. 井戸6・22平面図・立面図
PL. 26. 古式土師器
PL. 27. 古式土師器・須恵器
PL. 28. 瓦器・羽釜・青磁・燈明皿
PL. 29. 土師器椀・土馬・下駄
PL. 30. 刀子・石造遺物
PL. 31. 陶磁器・須恵器
PL. 32. 陶磁器・瓦破片
PL. 33. 木製品・砥石
PL. 34. 古式土師器実測図
PL. 35. 瓦器・燈明皿・土師器・陶磁器・須恵器実測図
PL. 36. 木製品・石造遺物実測図

Ⅰ　安満遺跡とその周辺（ＰＬ．１）

高槻市北方の山塊に源を発する檜尾川は、成合の谷間をぬけて安満山の麓で大きく東方に流れを変え、天井川となり平野へ流出する。この川の西方一帯に安満遺跡がある。

安満遺跡は海抜９～１１ｍの微高地（檜尾川が形成した扇状地）上に位置していて、前面には檜尾川と淀川が形成した豊かな沖積平野が広がっている。遺跡の範囲は京都大学農学部付属摂津農場を中心として、北は国鉄東海道本線をこえて旧西国街道付近から南は阪急京都線をいく分こえて国道１７１号線近くまでの南北約５００ｍ、東は檜尾川右岸から西は八丁畷町の国鉄陸橋まで約1,５００ｍである。

遺跡の中心部と推定される付近一帯は京大農場の果樹園や水田などによって緑が保たれているが、遺跡北方の山麓や南方の沖積平野には、近年の急激な宅地造成により人家が密集している。

一方、西国街道を隔ててすぐ北方には古墳時代の安満北遺跡・古曾部南遺跡があり、後方の安満山には公園墓地建設に先だち発掘調査された安満山古墳群や名神高速道路建設工事で調査された磐手杜古墳群・紅茸山古墳・紅茸山遺跡などがある。また西北方の天神山の丘陵からはかって銅鐸が出土している。この付近には天神山遺跡のほか、芝谷遺跡・古曾部遺跡・奥天神町遺跡などがある。このように付近の山麓や丘陵上には多くの遺跡があり、高槻でも遺跡の分布密度の高い地域である。

地区割について（ＰＬ．２）

大阪府教育委員会がおこなった昭和４２年度の範囲確認調査の際に東海道本線と京大農場にはさまれた地域は条里制遺構としての地割が畦畔によってよく残されているので、安満遺跡全域の地区割はこの条里遺構を生かして行うことになった。坪毎に番号をつけ、さらにこの中を細分することとした。

安満遺跡周辺の坪の一辺の長さは、平均すればほぼ１０８ｍである。まず、これを４等分して、一辺２７ｍ四方の１６区画内をそれぞれ３ｍ四方の９区割とすることとし、１～９までの番号で表わし、この３ｍ四方の区割を、調査に

当っての最小単位とすることにした。

この最小単位をあらわすには、例えば１４（坪・１０８ｍ）――Ｊ（大区画・２７ｍ）――４（中区画・９ｍ）――６（小区画・３ｍ）等の数字とアルファベットで表わされるわけである。

昭和４２年に設定されたこの区画は今後遺跡の範囲が拡がることを予想して、西は国鉄跨線橋から東は京大農場東方まで設定されたが、今回の調査はこの区画よりさらに東にあたる。範囲確認調査では、(1)として表わされているが、新たに１０８ｍの坪ごとに区画を設定し、これを安満東１とした。同時にこの安満東１の北も従来区画が設定されていなかったので、安満東北１とした。

なお、今後、従来の区画より北方の地域が調査される可能性もあるので、この地域は安満北１～１０というようにする。

Ⅱ　調査経過

安満遺跡は、昭和３年にその存在が知られ、淀川北岸で唯一の弥生時代全時期にわたる遺跡として知られるにいたった。

昭和７年に小林行雄博士は「安満Ｂ類土器考」において安満Ｂ類土器と九州第二系弥生式土器の関連を論じ、安満Ｂ類土器が北九州までたどりうるとし、両者の類似を指摘した。その後、安満遺跡は京都大学農学部付属農場とその周辺の水田として、現状はほとんど変更されることなく最近にまでいたった。

昭和４１年２月、京大農場の北側に、地元の安満実行組合が幅員２ｍの農道を造った際、大阪府立島上高等学校地歴部の手によって、幅２ｍ、長さ２８ｍのトレンチが設定された。

この調査は工事に制約された応急の調査であったから、ほんの局部的調査で終ったが、調査区域からは弥生時代各期の遺物が出土し、中には特異なスコップ形鋤・平鍬・杓・弓などの木製品がある。また、前期や中期の遺構を発見し、それらが京大農場北方の水田に広くおよんでいることがわかった。

翌昭和４２年１月、前記の調査区の東側で宅地造成工事が進行中であることが判った。これは、安満遺跡における最初の宅地造成工事であったが、弥生時

代後期の溝、古墳時代の溝、柱穴等の他に、木棺３基を埋葬した方形周溝墓を発見した。（註１）

宅地造成はさらに広がる恐れがあるため、大阪府教育委員会は国庫補助金の交付をうけ、予想される開発に対する資料をえるため、昭和４２年６月と１１月～１２月の２回にわけて範囲確認調査を実施した。

この調査は、農場と国鉄線路内に挟まれた、南北１１０ｍ、東西１２００ｍの範囲について行なわれた。その結果、遺跡は海抜９～１１ｍのほぼ同一等高線上の微高地上に位置し、東西に少しずつ移動しながらも長期間営まれた集落であるということが判明した。

（註２）

この範囲確認調査の結果によって、具体的遺跡保存の対策を検討する間もなく、昭和４３年５月には遺跡の中心地と推定される約6,７００㎡、また遺跡の東端近くの約２０,０００㎡についての宅地造成が計画された。

大阪府教育委員会は国庫補助金の交付を受け、この２地域についての事前発掘調査を実施したが、中心部6,７００㎡の地区からは、弥生時代中期の住居跡や溝、また前期の集落を周ると推定される２条の溝を検出し、この溝内からは、未製品を含む多数の木器類を検出した。東の２０,０００㎡の地域は、その中央部に檜尾川の旧河床と推定される幅約１００ｍにわたる礫層のあることが明らかとなり、遺構はこの地域の西端と東端近くで、川による流失をまぬがれた部分にのみ残存していたにすぎなかった。両地点とも弥生時代末～古墳時代にかけての遺物が出土し、東では竪穴式住居跡、西では溝等を検出した。

遺跡の中心と推定され、木製品を多く含む溝などの重要な遺構や遺物の発見された地域については、その重要性を強く訴え、保存を要望する運動が高槻市民の間からおこり、文化庁においてもその重要性を認め、史跡指定することに強い意向を示され、文化庁、大阪府、高槻市で協議の結果、とりあえず財団法人高槻市開発協会が先行取得することにして保存が決定し、大阪府は昭和４４年３月２２日仮指定を行った。

史跡仮指定地より離れた東方の８－Ｅ地区については仮指定がされる一方で、宅地造成に先立って事前調査が行われた。

昭和４５年２月～３月にかけては、農場内の遺跡範囲確認調査を行い、農場全域が遺跡に含まれることを確認し得たのみならず、農場東南隅の試掘壙においては、弥生時代中期の木棺１基を検出した。（註３）

このように、これまで数次にわたる調査によって、農場を中心とする地域については弥生文化を知る上で、極めて重要な位置を占めるものであることが知られるにいたったが、東方の檜尾川沿いの地域については、昭和４２年度の範囲確認調査の際に少量の土器が検出されたにすぎず遺構については明らかでなかった。

昭和４３年の８－Ｆ地区、北９－Ｐ地区の調査においては、火災によって廃絶した隅丸方形の住居跡を１棟検出したほか、弥生式土器・土師器を検出した。あわせて、宅地造成工事予定地に東西２５０ｍ、南北９０ｍのトレンチが設定されたにもかかわらず、比較的新しい時期まで檜尾川の氾濫が続き、遺構が島状に取り残されたのではないかと推定されたにすぎなかった。

その後、檜尾川沿いの水田４１,７２３㎡が宅地造成される計画がなされ、昭和４６年５月にいたって、宅地造成業者より、開発行為に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いの協議についての依頼が高槻市教育委員会に提出された。大阪府教育委員会・高槻市教育委員会・宅地造成業者の三者による協議の結果、造成予定地内の遺構の範囲確認調査を行うことになった。

範囲確認調査は昭和４６年１０月１日より１１月２５日まで高槻市教育委員会が実施した。調査には、高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏を調査担当者とし、高槻市教育委員会嘱託吉水康夫が従事した。この調査によって古墳時代から平安時代に属する遺構・遺物を確認し、集落が東方へも広がっていることを再確認した。

弥生時代前期からの集落の変遷を知る上にも重要であり、またたび重なる檜尾川の氾濫の危険性と礫層という劣悪な条件のもとに集落を形成しなければならない意味を究明するためにも調査すべきであるという結論に達し、発掘調査を実施することになった。

大阪府教育委員会・高槻市教育委員会・宅地造成業者の三者による協議の結果、昭和４７年６月３０日に文化庁へ発掘届出書が提出された。調査対象とな

った地区は高槻市高垣町９１番地他の１２,０００㎡である。

調査は大阪府教育委員会・高槻市教育委員会の共催として実施された。高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏を調査担当者とし、昭和４７年７月２７日より調査を開始し、翌４８年１月２７日の調査終了まで高槻市教育委員会社会教育課橋本久和が従事した。

１０－Ｄ・ 東１－Ａ地区の調査

当調査地区は前記の調査地区のすぐ北隣で高垣町２５８番地にあたる。

南側の遺構のつづきがあることが予想されたので、宅地造成業者とその取扱いについて協議した結果、造成工事着手以前に発掘調査を実施することになった。

調査には、前回と同様のメンバーが従事し、昭和４８年５月１８日から６月２８日まで実施した。

Ⅲ 遺　構

調査地区が広大な水田であるため、調査地区を東西に二分して、まず東側の半分（東北１－Ｊ、東北１－Ｋ、東北１－Ｎ、東北１－Ｏ、東北１－Ｐ、東１－Ｃ、東１－Ｄ、東１－Ｇ、東１－Ｈ、東１－Ｌ、東２－Ａ、東２－Ｅ）について耕土および床土をユンボで除去した後、排土は西側の未調査区域にブルドーザーで移動した。

西側の半分（東１－Ｅ、東１－Ｆ、東１－Ｉ、東１－Ｊ、東１－Ｋ、東１－Ｍ、東１－Ｎ）についてもブルドーザー、ユンボを全面的に使用して排土を行ない、遺構平面図作成にあたっては、航空測量を３回にわたって実施した。

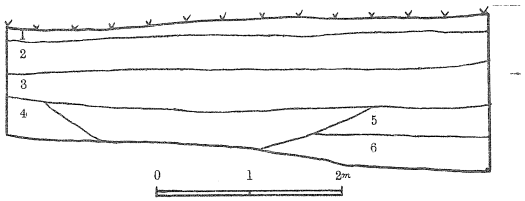
（ＰＬ．３・４・５・６・７）

本書に掲載した遺構平面図は航空測量図を修正加筆したものである。

a 遺跡の層序

調査地域が広大なため、層序関係は一様ではないが、もっとも基本的な層序関係を示している調査地区東北端では、床土はみられず、水

1. 耕　土
2. 褐色土層
3. 黒褐色砂質土層
4. 暗灰色砂礫層
5. 茶褐色砂層
6. 暗灰色砂礫層
7. 灰褐色砂層



第１図　遺跡の層序

田の耕土下にすぐ褐色土層が堆積していて、以下砂礫まじりの暗灰色土層、砂まじりの灰褐色土層を経て地山となる。一部で砂礫まじりの暗灰色土層を切りこんでレンズ状に堆積した茶褐色砂層がみられた。地山は黄緑色または青灰色の砂質粘土であるが、調査区の壁ぎわではこの砂質粘土に砂礫が多く混入していた。砂質粘土は北から南にかけてゆるやかに傾斜していて、北側の微高地を中心に建物跡が検出された。なお、北側の調査区の一部（東北１－Ｎ）では、地山上に褐色土が薄く堆積していて、遺構は、この層の上部から切りこんでいる。

検出された遺構には、溝・掘立柱建物・井戸などがあり、大別して古式土師器が検出されるのと、瓦器・燈明皿の検出されるものとに分れる。

b　掘立柱建物

今回調査した地区内で確認しうる掘立柱建物は２４棟を数える。これらの建物はその棟方向等により以下のごとく大きく３群に分けることができる。時期はいずれも鎌倉時代に属する。

〔Ａ群〕　柱通りが磁北とほぼ同一方向のもの、およびこれにほぼ直交するもの。

〔Ｂ群〕　柱通りが磁北よりほぼ１０度西にふれるもの。

〔Ｃ群〕　柱通りが磁北より４０度東にふれるもの。

以上の３群の他に柱通りが不ぞろいのものが若干ある。

３群に分けた建物群中で柱の切り合い関係からみてＡ群はＣ群より新しくまたＢ群もＣ群より新しいことがわかる。Ａ群とＢ群については柱の切り合い関係が無いため時間的前後を判断できないが、Ｃ群に対してＢ群がより磁北に近い棟の方向をもつので、Ｃ→Ｂ→Ａ群という関係も考えられる。

３群中最も建物数の多いＡ群についてみると、前後関係はわからないがＡ

－１１，Ａ－１２はどちらかが建替を行ったものである。このことから、Ａ群中の１４棟すべてが同一時期に存在していたとは考えられないが、Ａ群中建坪数のわかる１０棟についてみてみると、最高の１７.５坪の建物（Ａ－１１・Ａ－１２・Ａ－１３），５坪前後の建物（Ａ－４・Ａ－８・Ａ－１０）とそれ以下の建坪数の建物というようにＡ群中で３つに分けることができる。

また、Ａ－１１・Ａ－１２を中心としてＡ群中の建物が多数集まっているので、おそらくＡ－１１・Ａ－１２を中心とした一つのグループが形成されていたものであろう。

一方、Ａ－１３はＡ－１１・Ａ－１２とまったく同規模の建物であるが、西面する庇を有しているのでＡ－１１・Ａ－１２とは区別した方が妥当であろう。おそらく、この建物の西側、つまり調査地区外にもまだ建物があるものとおもわれる。

Ｂ群は調査地区の北側に検出されたもので、Ｂ－１の西側にはＢ－１の棟の方向と同じ杭列がみられた。これは目隠し用の塀であろうか。Ｂ－１・Ｂ－２とＢ－３は距離的に遠く、これらの中間は未調査地区であるが、同一方向の棟をもつ建物があると推定される。

Ｃ群には建物の柱穴がすべて検出されたものが１棟もないが、Ｃ－３の柱穴内に残存していた柱根は直経２０～３０㎝を測るものがあり、かなり規模の大きな建物であったことが推定される。

検出された建物中、Ａ－９・Ａ－１０・Ｂ－３、は桁行・梁行ともに他の建物に較べて長く、とくにＢ－３は桁行4.4ｍ、梁行4.2ｍを測る。検出当初、柱間が長大なため建物として取り扱うかどうか苦慮したが、同じように梁行が3.9ｍを測る建物が上牧遺跡でも検出されているので建物とした。

建物	柱間	柱間寸法(m)		長さ	広さ	面積		方位	備考
		桁行	梁行			m²	坪		
A－1	1×1以上	2.2	2.0					N－90°－E	
A－2	2×1	1.5	2.4	3.0	2.4	7.20	2.18	N－ 0°－E	PL. 8a
A－3	3×1以上	1.8	2.4					N－90°－E	
A－4	2×2	2.2	1.8	4.4	3.6	15.84	4.80	N－ 4°50′－E	
A－5	2×?	1.8						N－ 1°50′－E	
A－6	2×1	2.2	2.2	4.4	2.2	9.68	2.93	N－ 1°50′－E	
A－7	2×1	2.1	2.6	4.2	2.6	10.90	3.30	N－ 0°－E	
A－8	3×2	1.4	2.0	4.2	4.0	16.80	5.90	N－ 2°－E	
A－9	1×1	4.0	3.0	4.0	3.0	12.0	3.63	N－ 4°－E	
A－10	1×1	4.0	4.2	4.0	4.2	16.80	5.90	N－ 4°－E	
A－11	5×2	2.4	2.4	12.0	4.8	57.60	17.45	N－87°－E	
A－12	5×2	2.4	2.4	12.0	4.8	57.60	17.45	N－87°－E	
A－13	5×2	2.4	2.4	12.0	4.8	57.60	17.45	N－ 3°－E	PL. 14a
A－14	2×1以上	2.4	1.8					N－87°50′－E	
B－1	2×2	1.9	1.7	3.8	3.4	12.93	3.91	N－13°－W	PL. 9a・b
B－2	2×2以上	2.7	2.7					N－ 8°－W	PL. 9a・b
B－3	1×1	4.4	4.2	4.4	4.2	18.48	5.60	N－10°－W	PL. 15b
C－1	2×?	1.8						N－40°－E	PL. 9a・b
C－2	3×1以上	2.2	3.0					N－40°－E	
C－3	2×1以上	1.8	2.0					N－55°－W	
D－1	1×1	3.2	3.0	3.2	3.0	9.60	2.99	N－42°－W	
E－1	1×1	3.2	2.7	3.2	2.7	8.64	2.61	N－34°－W	
F－1	1×1	4.0	3.2	4.0	3.2	12.80	3.87	N－15°－W	
G－1	1×1	3.6	2.1	3.6	2.1	7.56	2.29	N－28°－W	

c　井　戸

遺跡が扇状地の端に位置し、檜尾川の伏流水が豊富なために、北方の微高地上をはじめ全調査地区から合計２９基の井戸が検出された。井戸内から検出された遺物等からみて、古墳時代と鎌倉時代のものとに分れる。また、検出された形状からみてつぎの４つに大別できる。

1. 掘り方のみ検出されたもの
2. 直径１m程度の掘り方に円形あるいは方形の曲物を一段あるいは数段つみ重ねたもの。
3. 円形掘り方に人頭大の塊石を積み重ねたもの。
4. 掘り方の底に曲物をすえて、曲物より上部は塊石をつみ重ねたもの。

井戸番号	掘り方	井戸枠	遺物	備考
1	不整形 東西2.6m・南北1.6m・深さ1.0m 底部の東隅に直径0.7m・深さ0.2mの円形掘りこみがある	不明。	砥石・土師器・弥生式土器・削串	
2	円形 直径0.9m 深さ0.85m	素掘り	土師器（船橋O－I）	PL・16a
3	円形 直径0.8m 深さ0.55m	大木のくりぬき枠をすえたもの。 掘り方中央で直径0.4mの痕跡がみられた。	弥生式土器 土師器（船橋O－I）	掘り形をとりかこむように0.5～0.7m間隔で小ピットを検出。井戸を覆う簡素な施設が構築されていたものであろう。 PL・16a PL・20
4	円形 直径2.3m 深さ1.7m	石組。 石組の上端で直径0.9m・底部で0.4m。	瓦器・須恵器・燈明皿・陶器	PL・18a
5	円形 直径1.4m 深さ1.3m	不明。	瓦器・須恵器 土師器	
6	円形 直径0.7m 深さ0.25m	曲物2段。 下段の曲物の直径0.25m・深さ0.2m・上段は直径0.35m・深さ0.06m 掘り形と曲物の間隙に小さな河原石をつめている。		E溝の内で検出した PL・19b PL・25
7	円形 直径1m 深さ1.9m	素掘り	土師器（上田町Ⅱ層） 数個体	PL・17a・b PL・21
8	円形 直径2m 深さ2.2m	底に直径0.4m・深さ0.1mの曲物をすえて、底から上方へ1.1mの高さに石を積む。 石組の上端で0.7m 底部で0.5mを測る。	砥石・瓦器・土師器・弥生式土器・下駄	PL・17a・b PL・21
9	円形 直径1.5m 深さ0.6m	石組。 2段0.4mのみ残存。	砥石	PL・16b PL・22
10	円形 直径2.2m 深さ0.8m 底径1.4m	不明。	瓦器・陶器・磁器・土師器・砥石	
11	円形 直径1.5m・深さ0.9m・底径1m	不明。	瓦器・燈明皿・須恵器・陶器・磁器	

井戸番号	掘り方	井戸枠	遺物	備考
12	円形 直径1.8m・深さ0.9m・底径1.3m	不明	刀子・瓦器・土師器・須恵器・磁器	従来あった井戸を深く掘り直している
13	円形 直径1.1m・深さ1m	不明	瓦器・土師器・燈明皿	
14	不整形 東西2.75m・南北2.4m・深さ1.6m 底部の西に片寄った所を直径0.8m・深さ0.3m程掘りこむ。	石組 最下部の一段のみ検出		
15	円形 直径1.9m 深さ1.25m	石組 上端で1.1m・底部で0.5mを測る	瓦器・土師器	
16	円形 直径2.2m・深さ1.2m・底径0.5m	石組 上端の石がわずかに残る。	瓦器・土師器 須恵器・弥生式土器	
17	円形 直径1.7m・深さ	不明	土師器	
18	円形 直径1.7m・深さ1.3m・底径0.85m	不明	瓦器・土師器 弥生式土器	
19	円形 直径1.6m 深さ0.35m	曲物 直径0.35m～0.42m 深さ0.1mの曲物を4重にすえる	須恵器・土師器	
20	円形 直径1.6m 深さ0.35m	曲物 0.7m×0.45m 深さ0.24mの隅丸方形の曲物を壊して直径0.35m・深さ0.2mの曲物をすえている。		
21	円形 直径1.1m 深さ0.6m	曲物2段 下段のものは直径0.4m・深さ0.1m 上段のものは直径0.4m・深さ0.25mである	瓦器	
22	円形 直径0.7m 深さ0.75m	曲物7段 最上段の曲物は直径0.35m 深さ0.18mで以下 0.35m・0.08m 0.35m・0.07m 0.35m・0.05m 0.35m・0.13m 0.3m・0.1m　最下段は0.28m・0.2mを測る		PL。19a PL。25
23	円形 直径1m 深さ0.6m	曲物2段 上段の曲物は直径0.4m・深さ0.2m 下段は直径0.4m 深さ0.3mを測る	瓦器・燈明皿・土師器	隣接して同規模の掘り方があり、井戸の可能性がある

井戸番号	掘り方	井戸枠	遺物	備考
24	円形 直径2m 深さ0.6m	不明。	土師器 磁器	
25	円形 直径1.5m 深さ0.4m	一辺0.5mの方形井戸枠四隅に支柱をたて、支柱に枘穴をあけ横桟を架している。桟の外側に杭をうちこむ。		PL.18b PL.24
26	円形 直径1.2m 深さ0.6m	不明。	瓦器	PL.18b
27	円形 直径1.3m 深さ0.25m	曲物。 直径0.4m 深さ0.2mを測る。		
28	円形 直径0.8m 深さ0.5m	不明。	土師器	
29	円形 直径1.5m 深さ0.5m	曲物 掘り形・中央で直径0.8mの痕跡がある。	土師器	PL.14b

d　溝

調査地区内で幾条かの溝が検出されたが、東2－Eで検出された東西溝の他は条里と方向を異にしている。

1.　W－A溝

調査地区西北端で幅2m、深さ0.5mを測り、東南に向って幅を狭めながら掘さくされた溝で、南端で幅1m、深さ0.3mを測る。溝内は暗青灰色の砂礫が堆積しており、溝底から古式土師器の破片が検出された。この溝は条里とほぼ45度の角度を示している。

2.　W－B溝（PL.13a）

W－A溝とほぼ直交するように掘さくされた大溝で、調査地区のすぐ南でW－A溝と交わるものとおもわれる。W－A溝と同様に暗青灰色の砂礫が厚く堆積しており、北端で幅4m、南端で幅約9m、深さ約1mを測る。溝内から古式土師器の高杯、甕が検出された。この溝は東1－K－3より北に続くものと思われるが、工事により調査できなかった。

3. A溝

東1－B－3の井戸16付近から東南に向って掘さくされたもので、幅1m、深さ0.3mを測る。褐色土層上面から掘られており、溝内堆積土中から古式土師器が検出された。

4. B溝

東1－C－4区で検出されたもので、幅1.7m、深さ0.3mを測り、西南から東北に向って掘さくされている。

溝内から瓦器椀、燈明皿が検出された。

5. C溝

調査地区の北端（東北1－Kより）で検出されたもので、暗褐色砂礫の堆積する幅2m、深さ0.5mを測り、東北1－0－1で、北から南に掘さくされたE溝と交わっている。溝内より曲物のふたが検出された。

6. D溝

井戸1の南から東南に向って浅く掘さくされた溝で、溝内には暗褐色の砂礫が堆積し、幅1～1.5m、深さ0.2mを測る。内部から遺物は全く検出されなかった。

7. E溝

D溝と平行して掘さくされており、幅1.2m、深さ0.3～0.4mを測る。東北1－0－5で褐色土の堆積がなくなる付近で終わっている。

8. F溝

E溝の終わった地点から南東に向って少し蛇行して掘さくされたもので、北で幅0.5m、深さ約0.3mを測り、南に向って幅、深さとも拡大していて、幅2m、深さ1mを測る。内部から遺物は検出されなかった。

9. G溝

東2－Eでほぼ条里と平行して東西方向に掘さくされた溝である。幅1m、深さ0.2mを測り、溝内から瓦器の細片を検出した。

e 土壙墓その他の遺構（PL。13b）

1. 土壙墓　W－B溝東岸の東1－K－8で土壙墓とおもわれる遺構を4基検出した。いずれも内部から古式土師器を検出した。

1号土壙墓（d－1）　長さ1m、幅0.6mの小判形の掘り方である。

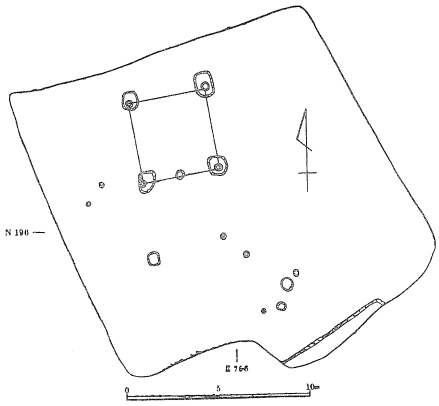
2号土壙墓（d－2）　第1号土壙墓の南0.5mの地点で検出された。幅・長さとも約1.2m、深さ約0.3mの不整形の掘り方である。

3号土壙墓（d－3）　2号土壙墓の南1.6mの地点で検出された長さ1.4m、幅0.7m、深さ約0.3mのほぼ長方形の掘り方である。

4号土壙墓（d－4）　3号土壙墓の西隣に検出された。幅・長さとも1m程のほぼ正方形の掘り方である。

これらの他に東1－H地区の東北すみに幅2m、長さ13m、深さ0.3mの落ちこみが検出された。内部から古式土師器の完形品や破片が多数検出された。（PL. 11a）

f　10－D・東1－A地区の遺構（PL. 15a・b）



第2図　10－D、第1－A地区の遺構

当調査区域の層序を東壁でみると、約1.6mの盛土下に耕土・床土・黄褐色砂礫層・黄灰色粘土層・暗褐色土層・黄緑色砂質土層の順で堆積している。遺構は黄灰色粘土層面に検出されるが、この遺構検出面に達するまでには洪水によって運搬、堆積したものと思われる黄褐色砂礫層を除去しなければならない。遺構が検出される黄灰色粘土層下には暗褐色土層が堆積しているので、東壁下でこの2層を除去して黄緑色砂質土層面での遺構の有無を確かめたが遺構は検出されなかった。検出された遺構は掘立柱建物1棟と柱穴数個である。

掘立柱建物Ⅰ　掘立柱建物は東西1間・南北1間の柱列を検出したが、北に柱列がつづくものかどうか今回の調査では確認できなかった。柱間は東西4.4m、南北4.2mで柱穴の掘り方は一辺約1m、柱痕は直径0.4m、深さ0.3～0.5mを測る。方向はN－10°－Wで B群に属しB－3とした。

その他の柱穴はまとまりがないが、南の方で検出された1個の柱穴は直径0.7m、深さ0.6mを測り、内部から瓦器椀の破片および燈明皿を検出した。（第2図）

Ⅳ 遺　　物

検出した遺物には弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・木製品など各時期のものがある。井戸や溝など比較的良好な状態で検出されたものや、他の遺物とセット関係がある程度わかるものを記述の対象としてまとめた。

なお、土師器にはいわゆる庄内式・布留式とよばれる一群と燈明皿などがあり、前者を古式土師器、後者は燈明皿・皿としてまとめた。

また、瓦器椀とそれに共伴する磁器・陶器・燈明皿などがあるが、それらは瓦器椀の実年代決定に参考になるものと考える。

a　古式土師器

類	番号	法　量	杯・口縁部	体　　部	脚・底部	色調・質	備　考
高杯	1	口径 16.4cm	ゆるく上方へひろがる杯部で、その端部は少し外反する。外面は斜め方向にハケ目をつけて仕上げている。3は端部に狭い面をもつ。			赤褐色。	10—D地区船橋 O－Ⅰ
	2	口径 17.7cm					W－B溝船橋 O－Ⅰ
	3	口径 15.5cm					
壺	5	口径 11.1cm 器高 14.8cm	短く外反する口縁部で、体径より口径が狭い。	球形の胴部である。	丸底。		
	6			球形の胴部で最大径はやや下位にある。	尖り気味の丸底。		東1－H地区の落こみ。船橋 O－Ⅱ
	7	口径 8.6cm 器高 11.4cm	短く外上方に直立する口縁部で体径より口径が狭い。	肩部の張りが体部のやや上位にあり、肩部以下の外面は細かいハケでていねいに仕上げている口頸部と体部の接合部内面は指のあとが著しい。	尖り気味の丸底。	明るい赤褐色胎土には細砂を含む。焼成良好。	
	8	口径 8.1cm 器高 10.8cm	短く外反する口縁部。	球形の体部で器壁は厚く、内外面ともハケで仕上げているが風化がはげしい。	丸底。	黄灰色。細砂を含む。やや軟質。	
	9	口径 8.7cm 器高 8.4cm	短く外反する口縁部で口径と体径はほぼ等しい。	肩部がやや高位にあり、肩部以下はハケで仕上げられている。風化が著しく、粘土のハク落も著しい。	やや尖り気味の丸底。	暗灰褐色。	

	10	口径 11.4cm 器高 8.0cm	外上方に大きくひらいた口縁部を特徴とする。	内外面ともていねいにヘラ研磨されている。	やや尖り気味の丸底。	明るい赤褐色胎土には細砂を含む。焼成良好。	
	11	口径 21cm	体部から上方へ外反してのびた頸部で、口頸部の中程で方形断面の突帯がつく突帯より上方はやや内彎して直立する。 上半の外面に細かいハケ目を斜めにつけている。	口縁部と肩部の接合部内面には指痕が残る。 接合部以下は欠失。		灰褐色。 砂を含み堅い。	
甕	4	口径 11.4cm 器高 12.6cm	短い口縁部が外方に開く。口径は体径より広い	上方にむかって体部がひらいている。	外方に開く脚がつく。		
	12	口径 16.3cm	短く内彎する口頸。 口縁上端は内方にやや肥厚し、内側に稜線がつく。	肩部には斜、横方向にハケ目がつく。口頸と胴部の接合部内面には指痕がつく。			井戸2 船橋 O－I
	13	口径 15cm		球形の胴部、外面はハケ目をつける。 頸・胴接合部内面には指痕がある。		灰褐色。 焼成良好。	10－D 船橋 O－I
	14	口径 16.6cm 器高 25cm	短く「く」の字形に外反する口頸で、口縁端部外面をなでることによってその上端は小さく隆起している。 口頸屈折部には鋭い稜がつく。	最大腹径は体部のやや上方にある。外面には細かい叩目がつく内壁を削ってうすくしている。 外面には黒いススが全面につく。	尖り気味の丸底。	暗褐色。 堅い。	井戸7 上田町第Ⅱ層
	15	口径 184cm 器高 26cm	口縁上端が内方にやや肥厚した短い口頸が内彎する。	最大腹径は体部中程にあり、体部上方を横方向のハケで、体部中程は斜め方向のハケで仕上げている。内面は削ってうすくしている。　外面にはススがつく。			

b　須恵器

類	番号	法　量	口　縁　部	体　　部	脚・底部	色調・質	備　考
小型壺	102			最大腹径が体部上位にある。	短く外反する高台をもつ。	青灰色。 堅緻。	
蓋	107	口径 14cm 器高 5cm	ほぼ垂直で、端部は内傾斜面がみられる。	上面と口縁部の境界は稜線をなす。	稜線直上が凹彎する平たい面である。	灰白色。	10－D

蓋	108	口径 12.6cm 器高 6.2cm	ほぼ垂直にたち端部はわずかに外彎し、内傾斜面がつく。	ていねいにヘラ削りをして仕上げている。	平たく、つまみは中くぼみである。	青灰色、堅緻、細砂を含む精良な粘土を用いる	南壁の暗褐色土
有蓋高杯	109	口径 11.6cm 器高 9.6cm	たちあがりは高くやや内傾している。端部は外反し内側に沈線がみられる。	受部は外方に鋭く、受部以下は薄い器壁でゆるく外彎している。	脚高は杯高とほぼ等しく、基部から脚端へ外反しつつ拡がる。脚端上部に凹線を施して四角形透孔が三方に開く。	灰白色 細砂を含み堅緻表面がやや風化	南壁の暗褐色土

c　瓦　　器

類	番号	法　量	杯・口縁部	体　　部	脚・底部	色調・質	備　考
椀	16	口径 14.2cm 器高 5.2cm 底径 4.7cm	底部からゆるく外上方に開く口縁部で、口縁端内側に沈線がある。	内外面とも全面をていねいにへら磨きして仕上げている。	断面方形のしっかりした高台がつく。	黒色。 やや厚手。	10－D地区 器高指数33
	17	口径 15.4cm 器高 5.6cm 底径 6.2cm	口縁端内側の沈線はない。 底部からゆるく外上方に開く口縁部である。口縁先端よりやや下位で口縁部が直立するので段がついている。	内面はていねいにへら磨きして仕上げている。 外面は下半のみ手づくね痕をへらでみがいて仕上げている。	外方に開く断面三角形の高台がつく。	銀黒色。 やや厚手。	井戸23 器高指数40
	18	口径 14.5cm 器高 5.7cm 底径 4.2cm					井戸21 器高指数39
	19	口径 13.7cm 器高 4.4cm 底径 4.4cm	底部からゆるく外上方にのびた口縁部で、先端近くでやや内側にむいている。 19のみ口縁端内側に沈線がつく。	外面は口縁端近くのみわずかにへら磨きをしている。 内面は口縁端近くはていねいにへら磨きをしているが、16～18にくらべ省略されている。 いずれも内外面に油を塗ったらしく光択がある	断面三角形の簡単な高台がついている。	銀黒色。 やや薄手。	井戸21 器高指数32
	20	口径 13.6cm 器高 4.4cm 底径 4.6cm					井戸10 器高指数32
	21	口径 12.7cm 器高 4.1cm 底径 4.5cm			細い粘土ひもをはりつけてわずかな高台がつく。		井戸16 器高指数32
	22	口径 11.3cm 器高 3.7cm	底部からまっすぐ外上方にのびた口縁部である	内面のへら磨きは簡単に仕上げられている。 外面のへら磨きはみられない。	高台はみとめられない。	薄手。	井戸11 器高指数36
	23	口径 11.2cm 器高 4cm					井戸12 器高指数34
羽釜	32	口径 32.8cm	三本の凹線をめぐらし、やや内側にむいている	内面は幅約2cmのハケで仕上げられている。 ひれは直径47cmを測る。		黒色。	井戸16

土 師 器

類	番号	法　量	杯・口縁部	体　　部	脚・底部	色調・質	備　考
燈明皿	2,4	口径 10.6cm 器高 1.4cm	外上方へゆるくのびた口縁部は少し肥厚し、先端をつまみあげている。		手づくねの痕がのこる平底である	黄灰色 薄手である	井戸２３
	２５	口径 11.1cm 器高 2.0 cm					
	２６	口径 8.6 cm 器高 1.8 cm	底部から丸味をおびて外上方へゆるくのびる		少し丸みをおびた平底である		暗褐色土層
	２７	口径 8.8 cm 器高 1.8 cm					
	２８	口径 9.1 cm 器高 1.8 cm	端部は丸くおわり外方に少しのびる。		手づくねの底で少し彎曲している	乳灰色。軟質	１０－D 地区
	２９	口径 9.6 cm 器高 2.0 cm	底部からまっすぐ外上方にのびた口縁で、底部との境で稜をなす。		手づくねの痕が残る平底。		井戸１１
	３０	口径 14.5cm 器高 3.1 cm	底部からゆるく外上方にのびた口縁。		平底。		井戸２３
椀	３１	口径 9.3 cm 器高 4.5 cm	外上方にゆるくのびた口縁で、先端は薄くなっている。		外方にはりだすしっかりした高台がつく。外面に「仏」の墨書		B 溝

e　陶 磁 器

主として井戸内から検出したもので、量的に多くはないが、中国製の青白磁や常滑焼などがある。

1.　磁器（ＰＬ．２８・ＰＬ．３１ｂ）

中国製の青磁と白磁の２種類がある。青磁はいずれも灰色がかった緑色で内彎する体部から口縁は少し外方に開く無文の碗である。井戸１１から検出された碗（ＰＬ．２８－１０３）は全面に施釉されており、内底面には方形のスタンプが押されてある。白磁はいずれも井戸１２から検出した碗の底部である。底部の削り出しが極めて浅く、この部分には施釉されていない。釉色は乳白色である。（註４）

2.　陶器（ＰＬ．３１ａ）

井戸４・１２から常滑焼の破片を若干検出した。時期は鎌倉時代のもの、

（ＰＬ．３１－１０１）と室町時代のもの（ＰＬ．３１－１１０）である。他に近世の湯のみや天目茶わんなどを表土除去作業中に検出した。（註５）

f　瓦（ＰＬ。３２ｂ）

表土除去作業中に４片を検出した。

g　木製品

井戸内から下駄・削串・曲物底板・漆塗椀などが出土している。

1.　下駄（ＰＬ．２９）

井戸８から１個出土している。台部と歯部を一木で作った連歯下駄で、四隅を丸く削って、隅丸の長方形をなしている。大きさは台の長さ２０.５㎝、幅９.６㎝、歯の高さ３.８㎝を測る。台上の指痕から左足用とわかる。

2.　削串（ＰＬ．３３ａ）

井戸１の底部近くから検出したもので、端が鋭角に尖った下端部と鈍角の上端部の２破片がある。いずれも幅３㎝、厚さ０.３㎝程度である。

3.　曲物底板（ＰＬ．３３ａ）

一部が欠失しているが、直径１２.３㎝、厚さ０.７㎝を測る。

4.　椀（ＰＬ。３３ａ）

井戸５の堆積土中から黒漆塗りの木製椀の底部破片が出土している。底径３.５㎝で、わずかな削り出し高台をつけている。

5.　用途不明木製品（ＰＬ。３３ａ）

井戸１から出土したもので、自然木の皮をはぎ表面をわずかに削り、両端をまっすぐ接断したものと、斜めに接断して先端を二つに尖らせたものがある。前者は長さ１９.７㎝、後者は１３.５㎝を測る。

h　石造遺物（ＰＬ。３０）

表土除去作業中に主として東１－Ｋ地区から検出したもので、石仏・一石五輪塔・五輪塔の宝珠を検出した。

1.　石仏

扁平な花崗岩の先端を尖らせて造ったものである。ほぼ完全なもので、総高５３㎝、幅は下部の最も広いところで約３８㎝、中程で２７㎝、厚さは１０㎝を測る。

2. 一石五輪塔

花崗岩製で総高約５０㎝、基礎は高さ２２㎝、幅１４㎝、塔身は高さ８㎝、幅１３㎝、笠は高さ６㎝、幅１２.５㎝、請花は高さ３㎝、幅１０㎝、宝珠は高さ8.５㎝、幅１０㎝である。

3. 五輪塔の宝珠

２個検出されている。いずれも直径２３㎝、高さ２０㎝を測り、花崗岩製である。

i　刀子（ＰＬ.. ３０）

井戸１２より比較的良好な状態で鉄製刀子を一本検出した。断面三角形で長さ２１.４㎝、莖は8.９㎝、身幅は基部で２㎝を測る。

j　土馬（ＰＬ.. ２９）

暗褐色砂質土層から検出したもので赤褐色の土師質である。頭部のみであるが、馬の特徴をよく把え、また手綱等の馬具の装着についても丁寧に表現してある。

k　砥石（ＰＬ.. ３３ｂ）

いずれも井戸内から出土したもので８個あり、使用によりかなり磨滅している。石材は砂岩・粘板岩である。

Ⅴ　結　　語

今回の安満遺跡東方地区の調査によって、古墳時代および中世の集落を検出した。この結果、これまで数度にわたる調査とあわせて弥生時代から中世にかけての集落の変遷がたどれるだけでなく、中世集落を考古学的に解明する糸口をつかむことができると信ずる。

従来の範囲確認調査等によって、古墳時代には安満の集落は東方に移動していることが推定されていた。昭和４３年の北－９－Ｐ地区の調査では、弥生第Ⅴ様式および古式土師器を出土した方形竪穴式住居１棟が検出されたのをはじめ昭和４７年７～８月に調査した９－Ｃ・Ｄ・Ｇ・Ｈ地区では井戸と推定され

る円形ピットをいくつか検出した。

今回の調査では2条の溝と井戸、土壙墓などを検出した。しかし住居跡を検出できなかったため集落の実態を正確に把握するにはいたらなかった。これまでの調査や今回の調査で検出した土器類は、いわゆる庄内式、布留式土器であり、ある程度の時間的幅をもってはいるものの古墳時代前期の大規模な集落跡が安満遺跡の東方にあるものと推定できる。今後の調査によってその実態がより一層明確になるものと期待される。

今回検出した2条の溝は、遺物や砂礫層の堆積状態からみて、同時期のものであって直線的にほぼ直交して掘さくされたものである。これらの溝は桧尾川氾濫原に形成された水田の用排水灌漑施設と考えられ、調査地区北方の微高地上で検出した井戸は集落の一隅にあたり、住居跡は今回の調査地区の北西一帯に、また水田跡は調査地区西方の低地および2条の溝を検出した付近より南側に拡がっているものと推定される。

このように古墳時代になると桧尾川の氾濫を克服して集落を形成するが、この現象は安満遺跡だけではなく、上牧遺跡でも同じである。上牧遺跡では住居跡が確認されており、時期的にも安満遺跡と非常に接近している（註6）。

古墳時代になると河川ぞいの沖積微高地上に集落が進出することが顕著となり、弥生時代中・後期の集落が芝谷・紅茸山・萩之庄など多くは丘陵上にあるのと対称的である。集落が低地に進出する背景には政治的・社会的諸条件が整ったことを示している。つまり、前方後円墳を築造する土木技術と低湿地開発に必要な農業土木技術は表裏一体をなしている。前方後円墳を築造することのできる階級はその共同体成員を動員して低湿地の開拓を行ない、より多くの剰余生産物の収奪を企図したのであろう。

安満遺跡の歴史は桧尾川との闘いの歴史でもあった。集落と水田を安定させ維持していくためには、桧尾川の流路を固定し、その氾濫を防ぐ必要があった。古墳時代前期には古墳築造技術、農業土木技術をもって桧尾川の流路を固定したものとおもわれるが、その流路が現在の流路と近いものか、それとも今回の調査地区西方を流れていたものかなお明らかでない。しかし今回の調査で推しうることは、この桧尾川の流路を長期的に固定することができなかったため氾

濫がくり返しおこり、集落、水田が破壊されたらしい。その結果、この地域での生産活動は放棄されたらしい。

農場東南、西南で奈良時代の遺構がわずかに検出されているので、奈良時代にはこの地域に集落を移したとも考えられる。

中世になると再び、桧尾川右岸に集落が形成された。この中世集落跡の調査によって提起しうる二・三の問題点をまとめてみたい。

今回の調査では掘立柱建物とそれに伴う井戸を数多く検出したが、これらの遺構の時期決定にあたっては井戸の内部から検出した瓦器・陶磁器類を参考にした（註７）。瓦器碗とともに検出された中国製磁器はその底部や施釉状態からみて宋・元時代の磁器碗の破片である（註８）。また、常滑焼の破片を検出しているが、それらは口縁部の形状から鎌倉初期とおもわれる。井戸内から検出した遺物の他に、整地層から石造遺物若干を検出したが、その中の五輪塔は鎌倉期のものと思われるが、一石五輪塔は室町期に属する。これらのことから今回検出された建物、井戸からなる集落跡は１３世紀から１４世紀を中心に営まれたものとしてほぼ誤りあるまい。

集落の具体的様相をまとめてみると、３時期に分けることが可能である。そのうちＡ群の時期についてみると、Ａ－１１・１２を主屋とし、Ａ－５・Ａ－６・Ａ－７が１つの単位をなし、Ａ－４・Ａ－８・Ａ－９・Ａ－１０が１つの単位をなすことが考えられる。前者のみについて考えると、Ａ－１１・１２が主屋であり、その他は納屋や従属者の住居と考えられ、これが一つの屋敷を構成しているのだろう。すぐ隣にＡ－１３があり、いくつもの屋敷が近接してあったことが想像される。

屋敷の構造をより具体的に検出した例として宮田遺跡があげられる（註９）。この遺跡の場合２～３時期に分けられるが、建物群は溝によって三つに区画されている。そのうちＡ群は主屋とそれに付属する建物があり、その構造は「一遍聖絵」に描かれている農家と酷似し、土塀の外の建物配置までそっくりである（第３図）。その構造は今日の農家と共通するところが多い。Ａ群の隣には従属者の建物かとおもわれるＢ群が、さらにその隣には倉を中心とした作業場のような建物のあるＣ群があり、これら３群で一単位を構成していたらしい。宮

田遺跡の場合、建物群の南側では水田の畦畔や水路も検出されている。安満遺跡は宮田遺跡ほど整然と区画されてはいないが同様のことが考えられる。

中世の農村景観については、従来古絵図などの文献史料から復元されてきた。しかも中世社会成立期の農村は集落が山麓の緩傾斜地や自然堤防上の微高地に立地し、それらの周辺に耕地が点在するのが普遍的であると考えられてきた（註10）。しかるに、安満・宮田遺跡はいずれも中小河川流域の微高地に立地し、同時期とおもわれる高槻市域内の中寺・天川・上牧等の諸遺跡も淀川の氾濫原に立地している。やゝ距った垂水西牧榎坂郷でも東寺領垂水庄以下諸寺領は神崎川の氾濫原に位置し、低湿田である「江田」・「加納」が散在していたとおもわれる。これらの遺跡の立地は偶然の一致ではなく、歴史的な条件があったとおもわれる。従来の見解では中小河川の流域に集落が形成されるのは低生産力に規制され、自然湧水を利用して農耕が営まれると考えられた（註11）。はたしてそうであろうか、いまあげたいくつかの遺跡は、たび重なる氾濫にも負けず集落を継続して営んでいる。この現象の背景には危険な氾濫原の湿田に積極的に立ち向っていく生産力と農民の組織化が進んでいたことが考えられる。

永原慶二氏は「低生産力に規制されて、中世初期農村は孤立分散的な形態をとらざるをえず、領主権力は農民を支配するには村落共同体を介して支配することが不可能であり個々別々に農民を支配収奪しなければならず、農民は経済的にも政治的にも劣悪な状態のまま、領主権力に個別的に従属せざるをえない」とし「このことが、中世初期農民の農奴的性格を示したものである」とした（註12）。

安満や宮田遺跡の場合、調査した範囲が狭いためなお集落の全貌を明らかにできない恨みがあるが、少なくとも孤立分散的な集落としては存在していないことだけは確かである。そうした意味から、かって清水三男氏が「畿内庄園の一般的性格といわれる庄園の散在性ということは、たんに領有関係の入り組みを意味するにすぎず、農民の村落結合、村落生活には大きな障害にはならなかっただけでなく、むしろ特定の本所から強力な支配をうけていなかっただけに、より自由に中世農民の生活の組織である村落を形成する条件にめぐまれていたといえる」とした見解は傾聴に値いしょう。

他の遺跡の報告例がないため、他地域ではどのような様子であるかを指適できないが畿内型村落の一類型を宮田遺跡、安満遺跡に見出しうることができるであろう。

さてこれらの村落内、あるいは村落間を組織し指導したものについて若干ふれてみたい。大山喬平氏は荘園社会の土地所有をめぐって①荘園領主、②在地領主、③村落領主、④名主層、⑤散田作人層の五つの階層を設定した。このうち、③、④、⑤の三者がもっとも直接的な中世村落の構成員であり、名主層は屋敷内をさいて「親類下人」をすえおき、小規模な家父長制的構成をとって「親類下人」を支配し農民的大経営を行ったと考えた（註１３）。遺跡からこのことがいえるであろうか。宮田遺跡の場合、A区に従属するようにB区の建物が検出され、建物の規模だけをみるとA－6が7.１5坪、A－7が8.２１坪であるのに対し、B－1が4.１3坪、B－4は1.２１坪である。安満遺跡の場合A－１１・１２に対していずれが従属する者の居住する建物であるかを指摘することは困難であるが、A－１１・１２は１7.４5坪と他の建物に比べ圧倒的に大規模である。

建物の規模だけからみると、有力な者が居住する建物と、そうでない者が居住する建物との区別があり、宮田遺跡ではその居住のちがいも指摘できる。大山氏のいう封建権力の一方の構成要素たる主従的支配権をここにみることは不可能であろうか。

安満遺跡は弥生時代以降現代にまで継続し、中世に限らず周辺の諸遺跡の中核的な存在である。いま、ここで問題にした中世の安満に関する史料として「安満庄目録案」がある。これには庄内の名田規模が記してありそれらの名田のうち地頭の所有田が目立って多く、この安満庄が鎌倉期に立券したことを示している。それによると、庄内に含まれる名田３０名、うち百姓名４４町２反３０歩、地頭名４７町２反３０歩、ほかに佃５町５反、麦下地野畠合計９町４反余で当時の規模で１１０町歩余の膨大なものである。この安満庄の範囲は、北は成合金龍寺に至り、南は高月・安満川（今の東天川あたりか）まで、東は桧尾川、西は芥川にはさまれた広い地域にまたがり、その間にいわゆる荘園村落が点在していて、これを安満庄と総称していたとおもわれる。

安満庄の立券当初の領主は不明であるが、１４世紀以後は領有関係の変更や新しい荘園設定などで次の３つの領有系統、すなわち①皇室領常林寺分安満庄、②木工庄安満勅旨田、③ 春日社領安満庄にわかれていたと推定されている。おそらく安満は②の散在荘園の一部であろう（註１４）。

かって、故天坊幸彦氏は「太平記」住吉合戦条に描かれている「阿間了願」という人物は安満出身の武士であったと考えられた（註１５）。また、木工庄安満勅旨田の公文職に「安満右馬允明武」なる人物が任命されている。この人物は安満在地の武士とおもわれる。実際にどのような武士たちが安満にいたのかは不明な点が多いが、南北朝期にはいずれかの勢力に加担する武士団を形成するまでになっていたことが想像される。

高槻には他に真上庄、田部庄、土室庄、奈佐原庄などがあり、真上虎才丸や氷室七郎次郎という武士が出現するらしい（註１６）。このように平安末期から鎌倉時代にかけては荘園村落を基盤として武士が成長してくるのである。この基盤となった村落＝中世集落跡の実態を把えることは中世社会構造を考えるうえで基礎的な作業である。

今回、安満遺跡の古墳時代・中世の集落を調査してみて、集落というものは単に自然現象として出現したのではなく、きわめて政治的、意識的に形成されたのであることがあらためて認識された。今後、安満遺跡の研究をすすめるうえだけでなく、古墳時代・中世の研究に貴重な資料となるであろう。（橋本）

註１　原口正三・田代克己「安満遺跡」月刊文化財　１９６９年３月号

註２　大阪府教育委員会「高槻市、安満弥生遺跡発掘調査概報」　１９６８年３月

註３　大阪府教育委員会「高槻市安満弥生遺跡発掘調査概要」　１９７０年３月

註４　白磁は太宰府出土資料の碗Ⅱ類とおもわれ、常滑焼・瓦器と共判していて、今後瓦器の実年代を考えるうえで参考となるであろう。

亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」考古学雑誌第５８巻第４号

註５　楢崎彰一氏の教示による。

註６　高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査概要」１９７３年４月

註７　瓦器碗については、これまで稲垣晋也氏や白石太一郎氏の研究がある。両氏の型式編年

には大きな差はないが、実年代をあてはめた場合には大きな差があるので、両氏の見解をただちにこの報告書に採用することはさけ、両氏の見解を参考に独自の時期を考えてみた。

註８　亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」考古学雑誌第５８巻第４号

註９　原口正三「高槻市史」第６巻考古編所収　１９７３年　高槻市史編さん委員会

註10　小山靖憲「初期中世村落の構造と役割」講座日本史２　１９７０

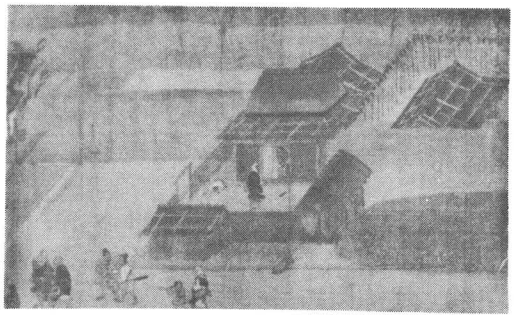
註11・12　永原慶二「日本中世社会構造の研究」

註13　大山喬平「荘園制と領主制」講座日本史２　１９７０

註14　高槻市史編さん係富井康夫氏の教示による。高槻市役所庁内報「たかつき」４９号所収

註15　天坊幸彦「高槻通史」高槻市役所　１９５３年

註16　富井康夫氏の教示による。高槻市役所庁内報「たかつき」４８号所収

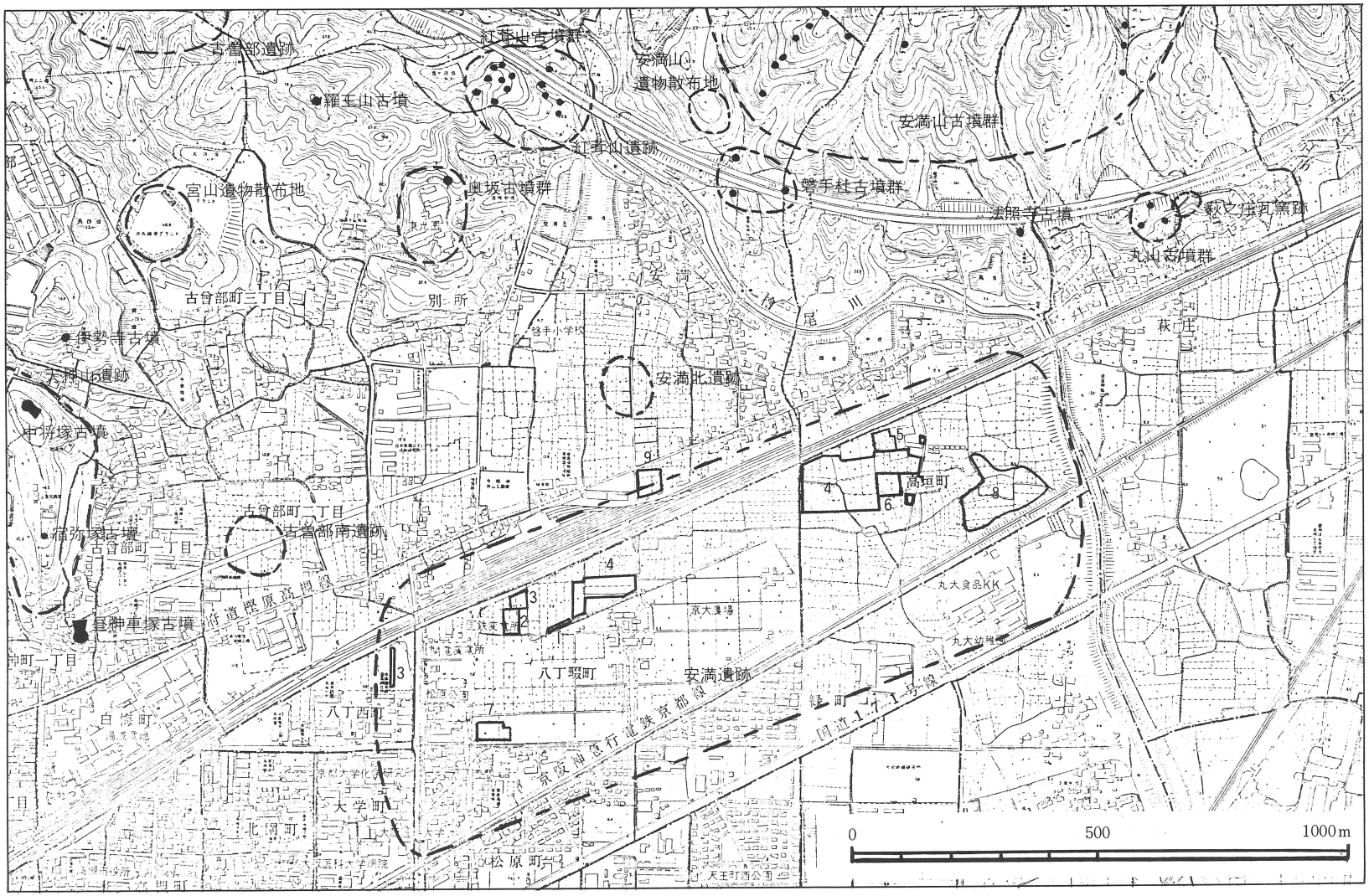


第３図　中世の農家（一遍聖絵より）

図　　版

PL.1

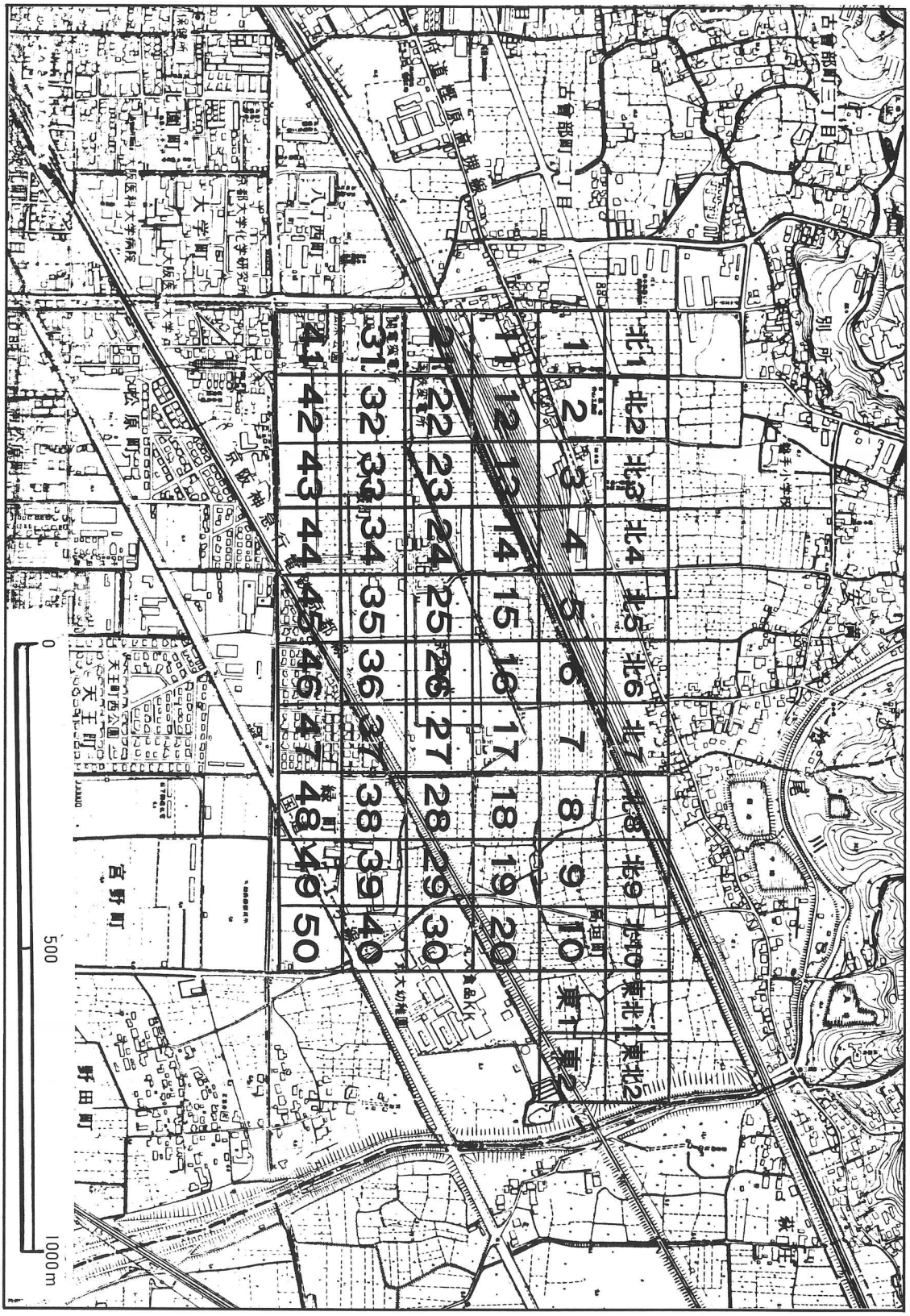
安満遺跡附近地形図・周辺遺跡分布図



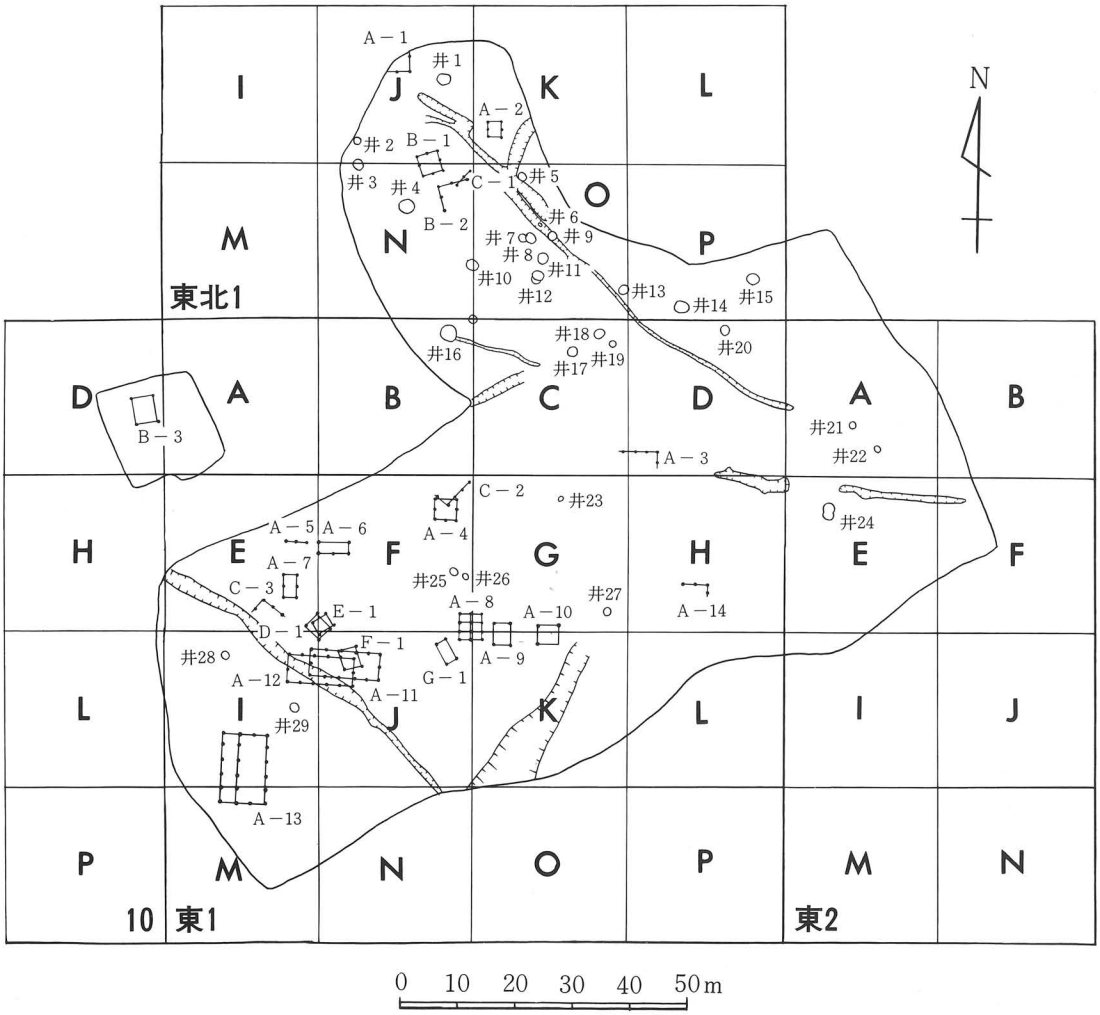
1．1966年２月調査（府立島上高校）　2．1967年１～３月調査（大阪府・高槻市）　3．1967年６月，11～12月調査（大阪府）
4．1968年５～10月調査（大阪府）　5．1969年８月調査（大阪府）　6．1972年７～８月調査（高槻市）
7．1972年８～９月調査（京都大学）　8．1972年８月～1973年１月調査（高槻市）　9．1973年２～３月調査（高槻市）

PL.2

安満遺跡地区割図

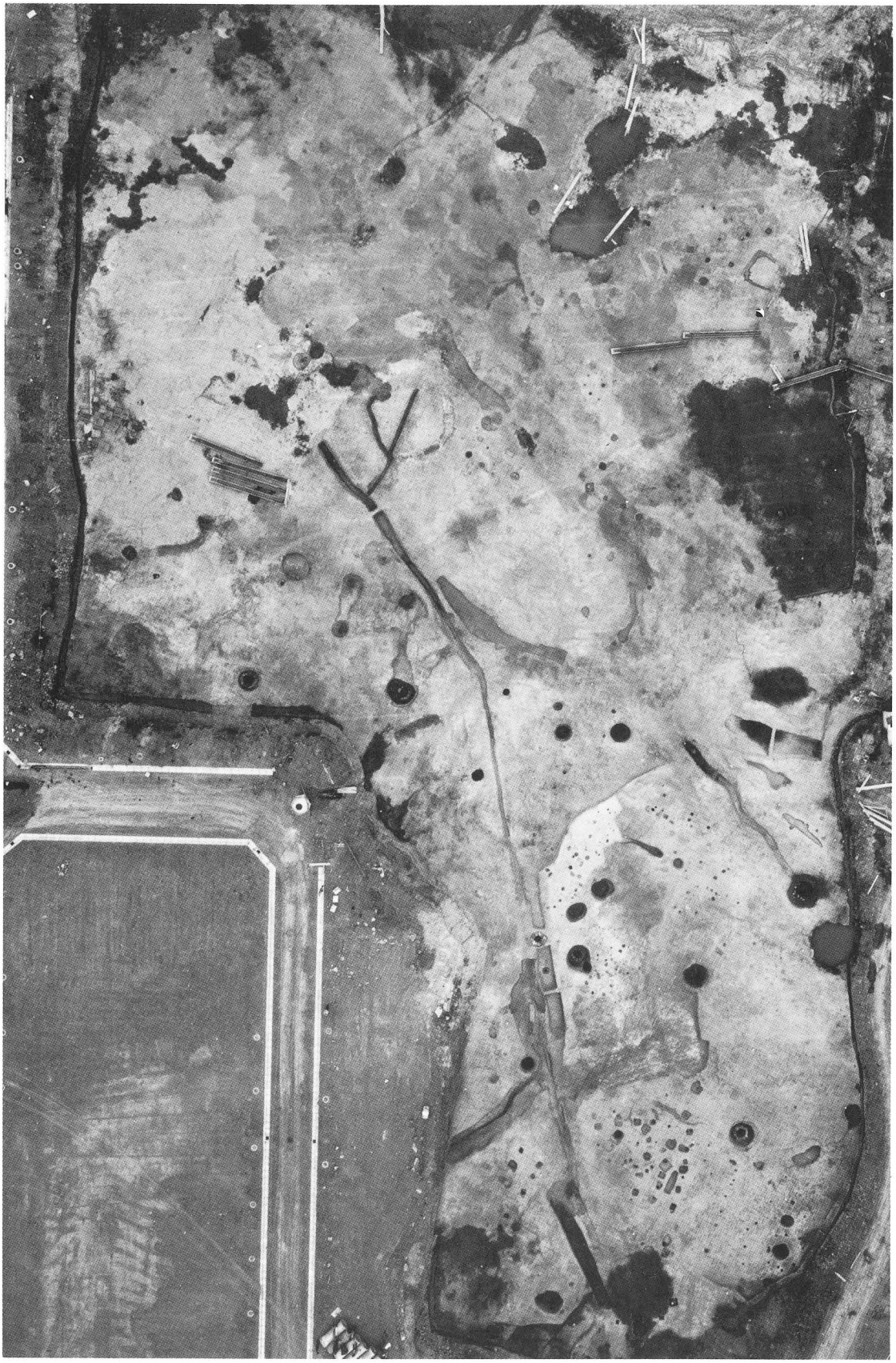


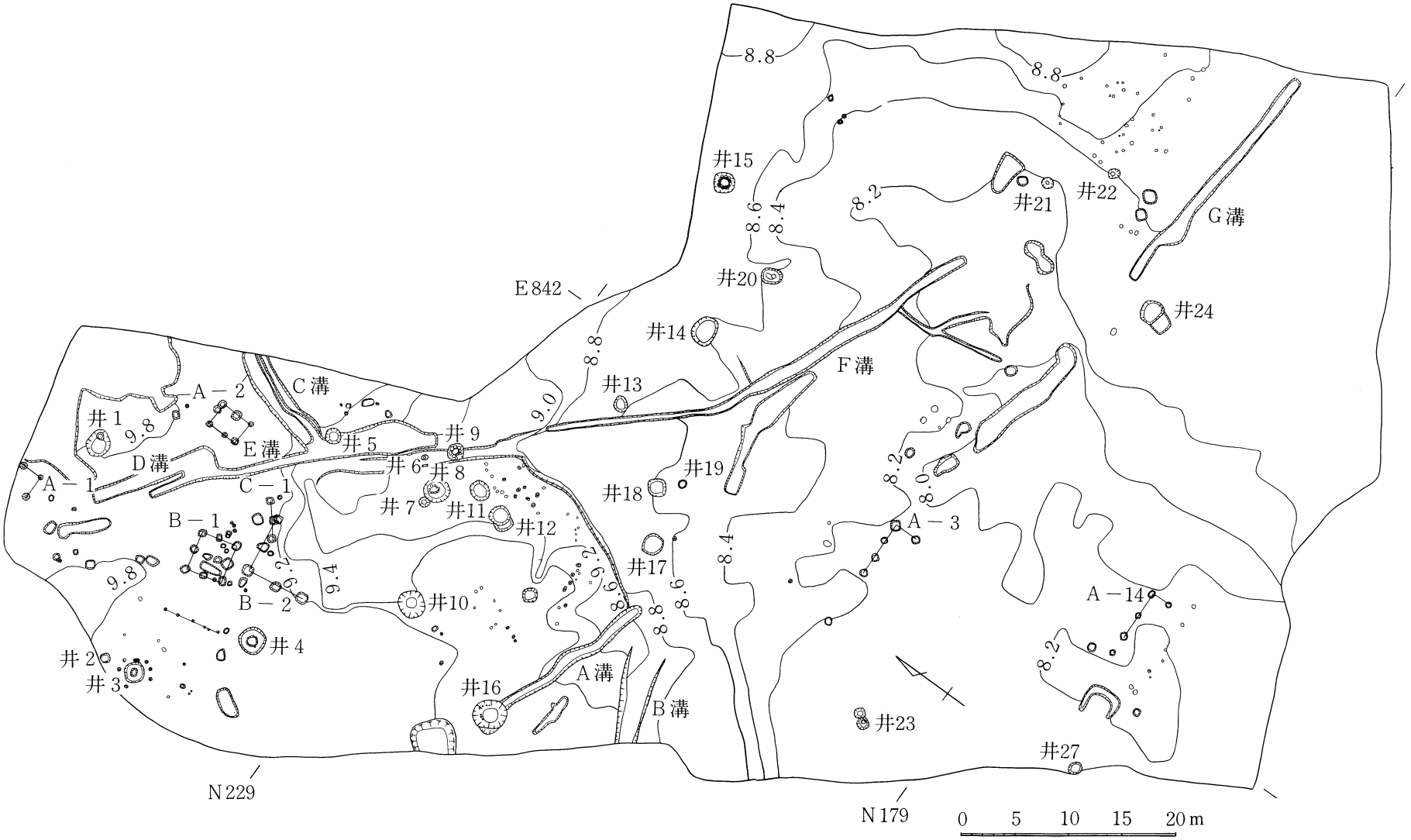
調査区地区割図


N
I
J
K
L
M
N
O
P
東北1
D
A
B
C
D
A
B
H
E
F
G
H
E
F
L
I
J
K
L
I
J
P
M
N
O
P
M
N
10
東1
東2
A－1
井1
A－2
井2
B－1
井3
井4
C－1
井5
B－2
井6
井7
井8
井9
井10
井11
井12
井13
井14
井15
井16
井17
井18
井19
井20
B－3
井21
井22
A－3
C－2
井23
井24
A－4
A－5
A－6
A－7
C－3
井25
井26
A－8
A－10
井27
A－14
E－1
D－1
F－1
井28
A－12
A－9
G－1
A－11
井29
A－13
0 10 20 30 40 50m

PL.4

調査区東側航空写真

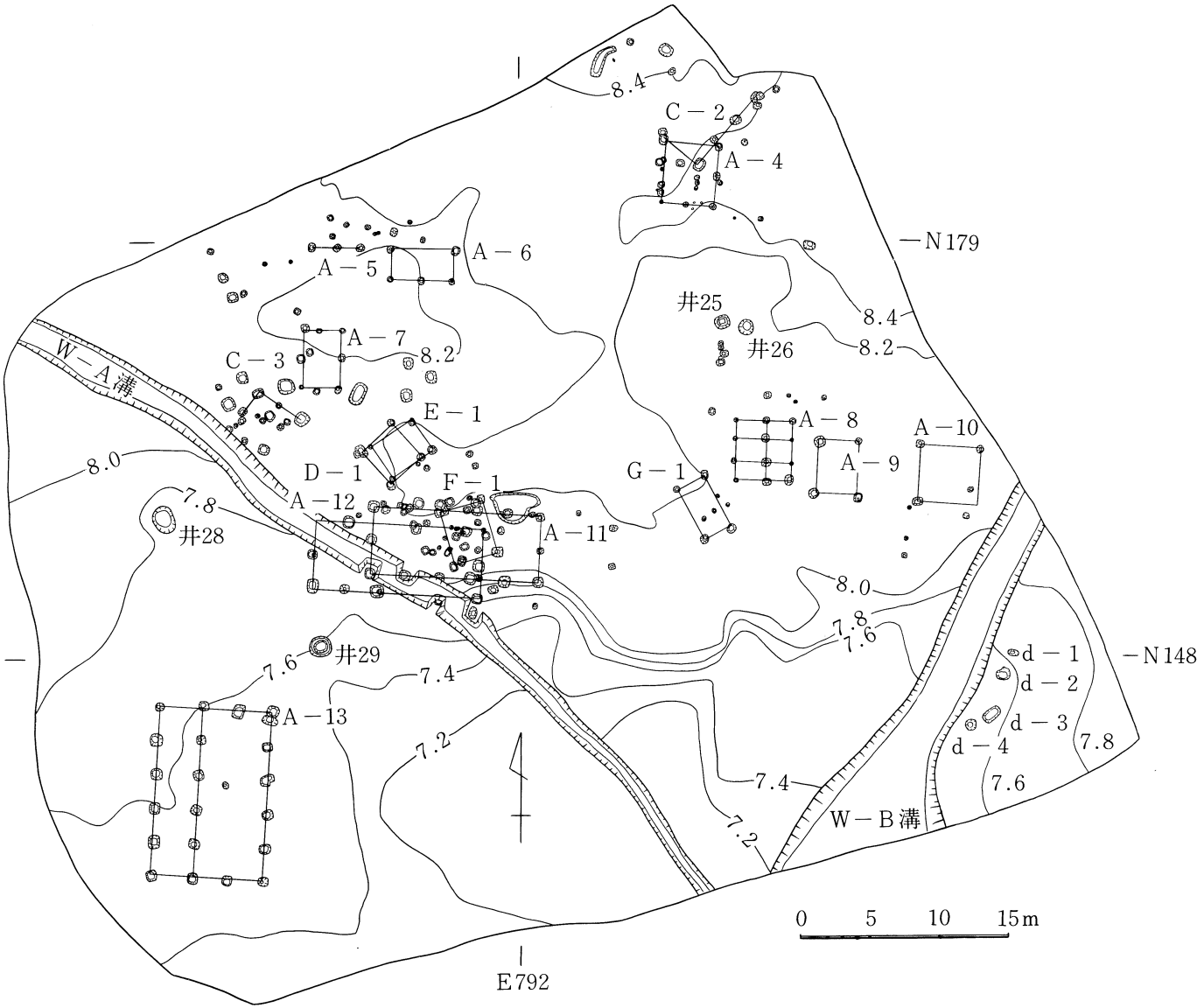




調査区東側遺構平面図

PL.5

調査区西側航空写真


8.4
C－2
A－4
N179
A－5
A－6
井25
8.4
A－7
8.2
井26
8.2
C－3
W－A溝
E－1
A－8
A－10
8.0
D－1
F－1
G－1
A－9
7.8
A－12
井28
A－11
8.0
7.8
7.6
井29
7.6
7.4
d－1
d－2
N148
A－13
d－3
7.8
7.2
d－4
7.6
7.4
W－B溝
7.2
0 5 10 15m
E792

調査区西側遺構平面図

a. 東北１－Ｋ地区・建物Ａ－２（北から）

b. 東北１－０地区（南から）

a. 建物B－1・2，C－1（北から）

b. 建物B－1・2，C－1（南から）

a．東側調査区（東１－Ｄ・Ｈ，東２－Ａ・Ｅ）南から

b．西側調査区（東１－Ｆ・Ｇ・Ｋ）北から

a. 東１－Ｈ地区土器だまり

b. 西側調査区（東１－Ｅ・Ｆ・Ｉ・Ｊ）北から

a. 東１－Ｅ・Ｆ・Ｉ・Ｊ地区建物群，Ｗ－Ａ溝（北から）

b. 東１－Ｅ・Ｆ・Ｉ・Ｊ地区建物群，Ｗ－Ａ溝（南から）

a. W－B溝（東北から）

b. 東1－K地区土拡墓群，W－B溝（東から）

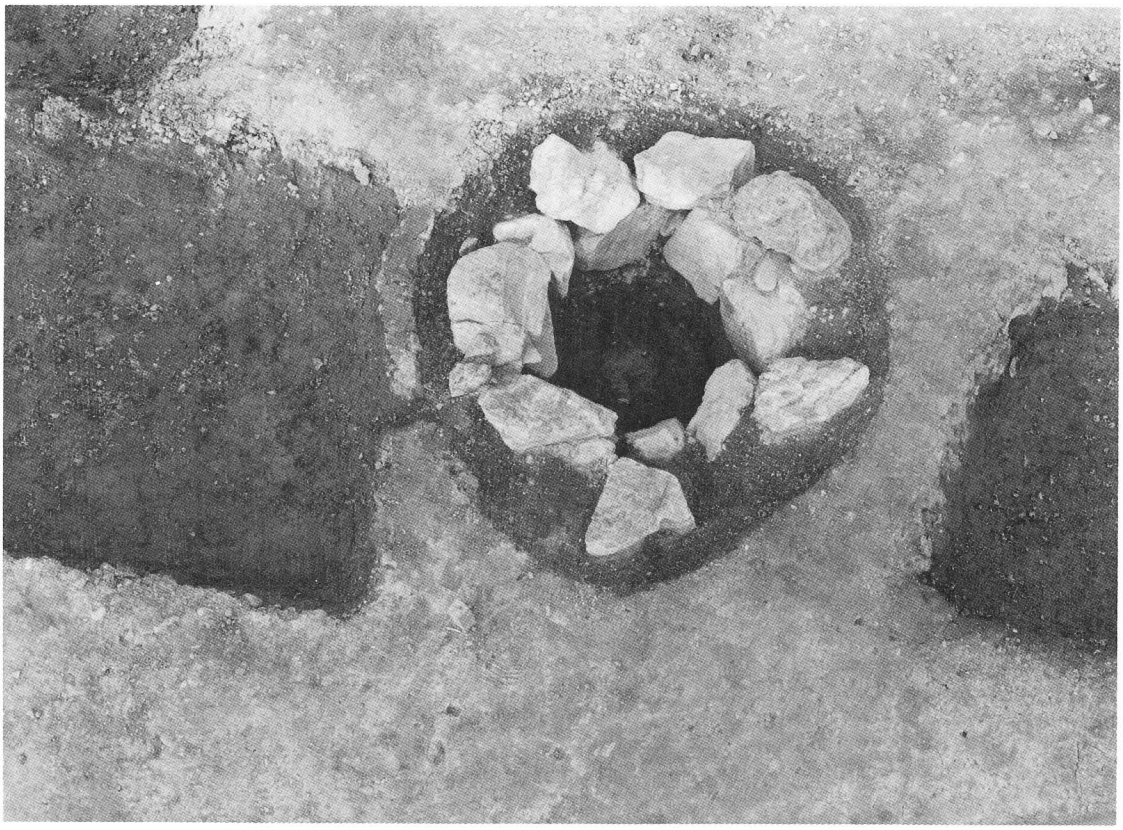
a. 建物Ａ－13（西から）

b. 井戸29

a. 10－D，東１－Ａ地区全景（東から）

b. 建物Ｂ－３（北から）

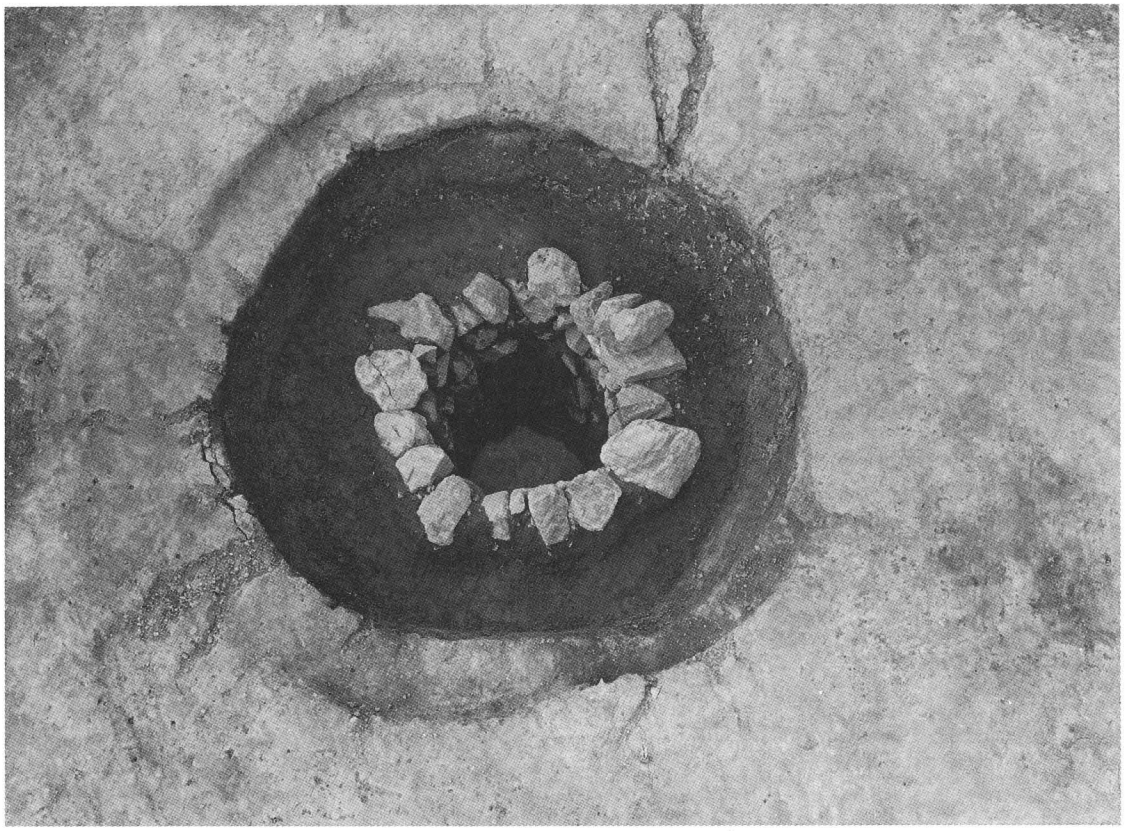
a. 井戸２・３（南から）



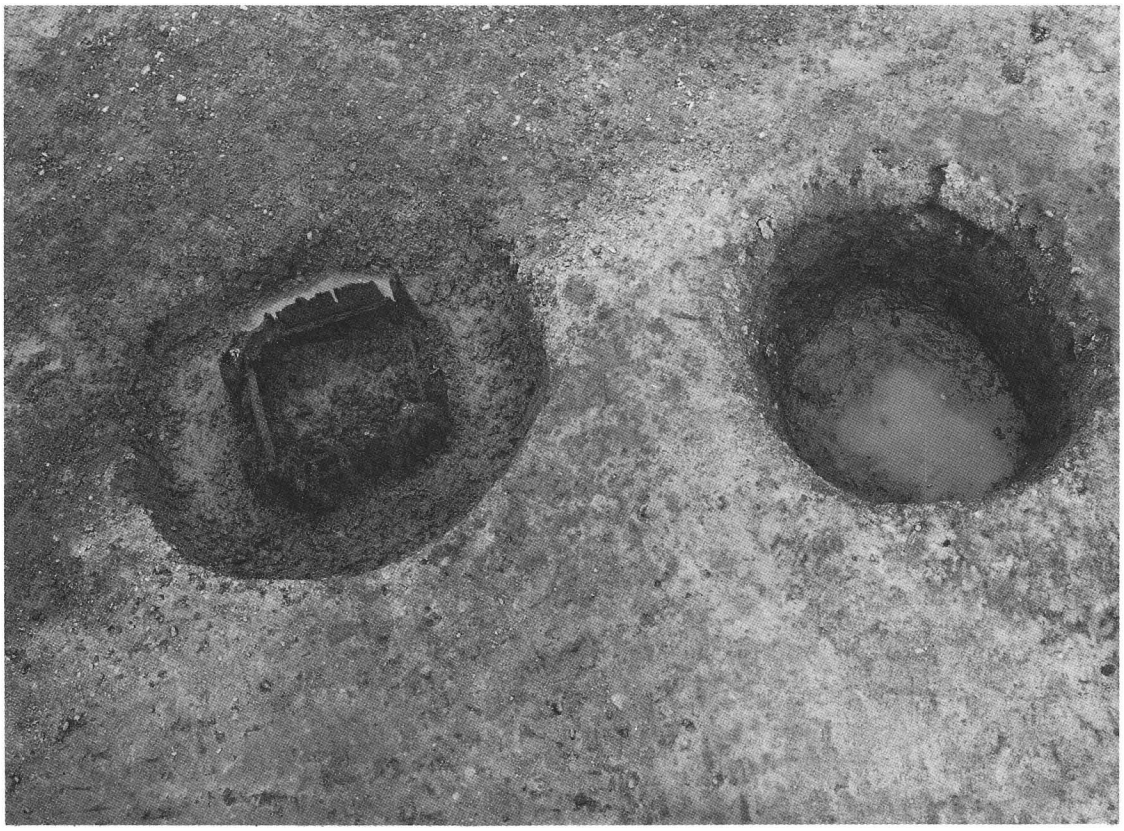
b. 井戸９（西から）

a. 井戸７・８（東から）

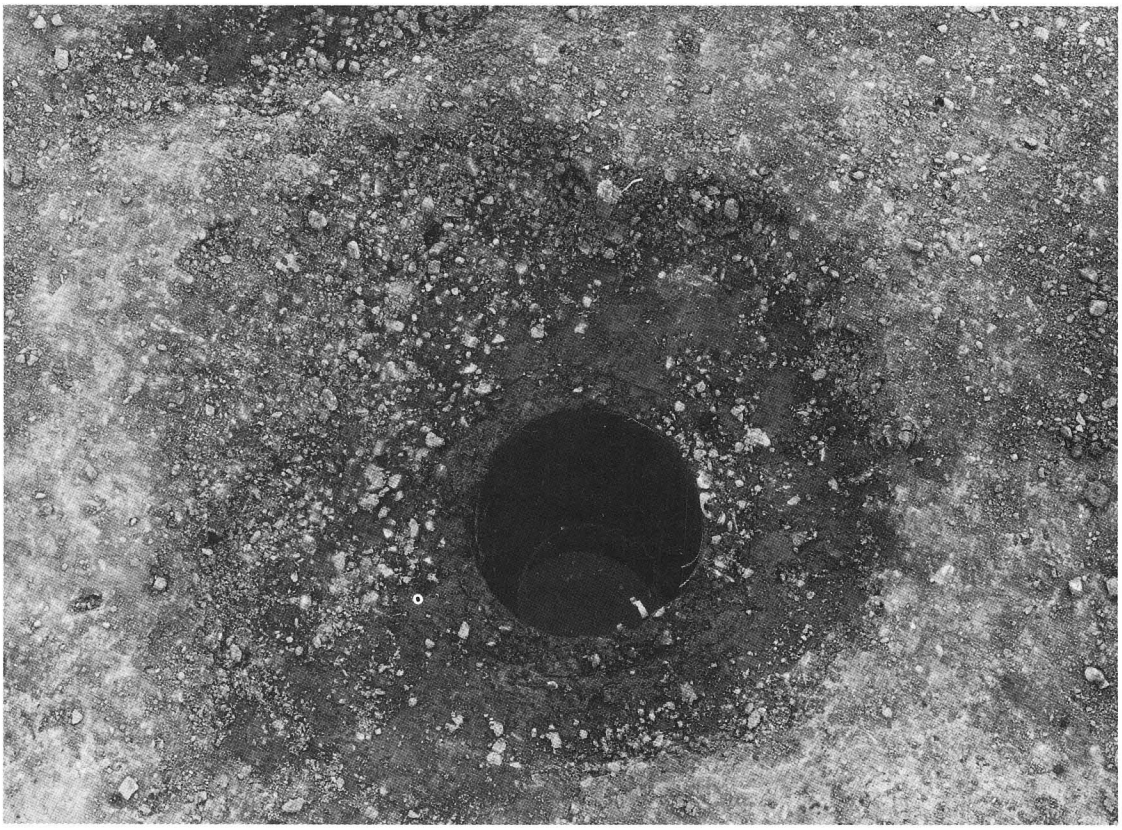
b. 井戸７・８断面（南から）



a. 井戸４（東から）



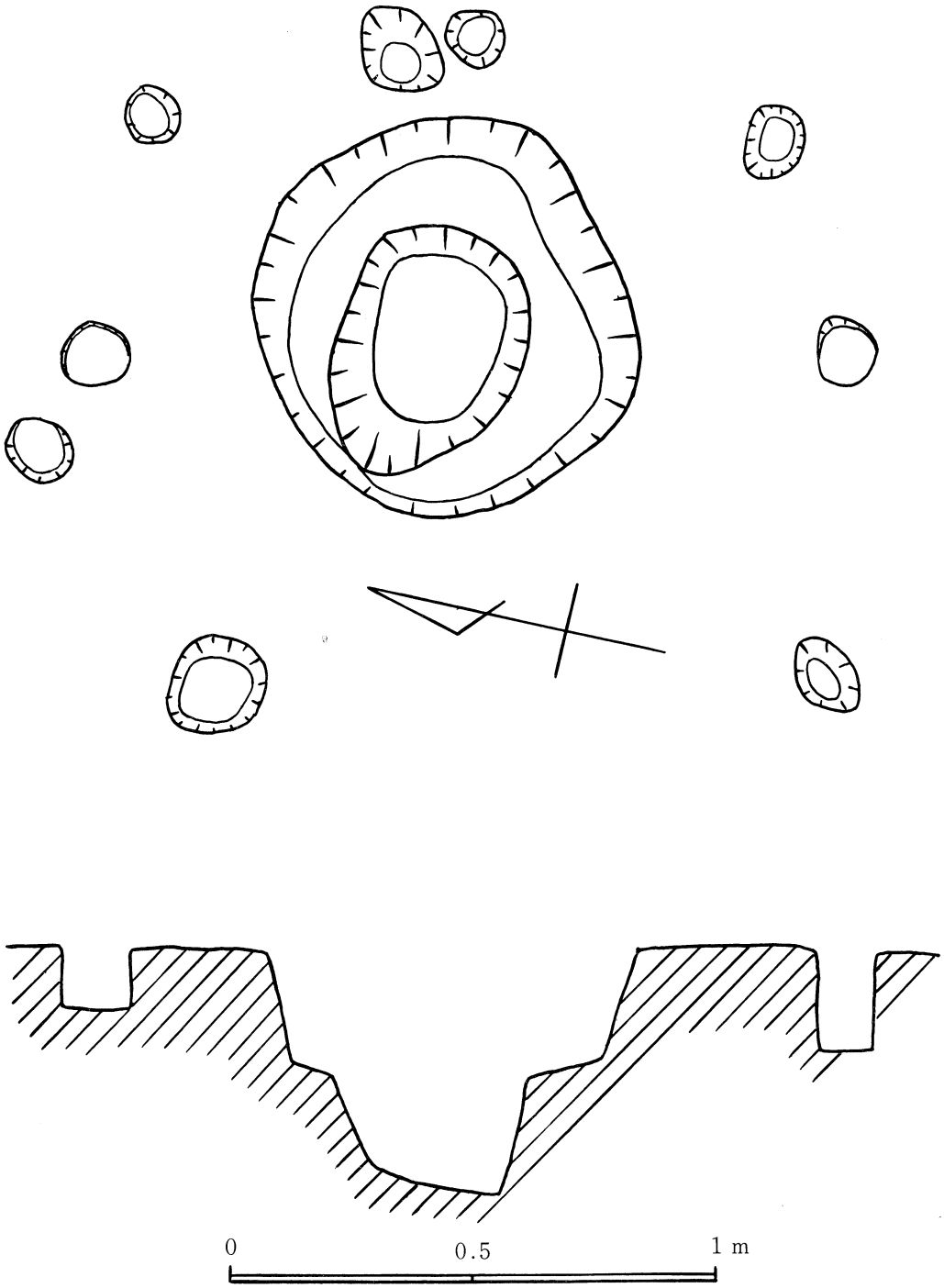
b. 井戸25・26（南から）



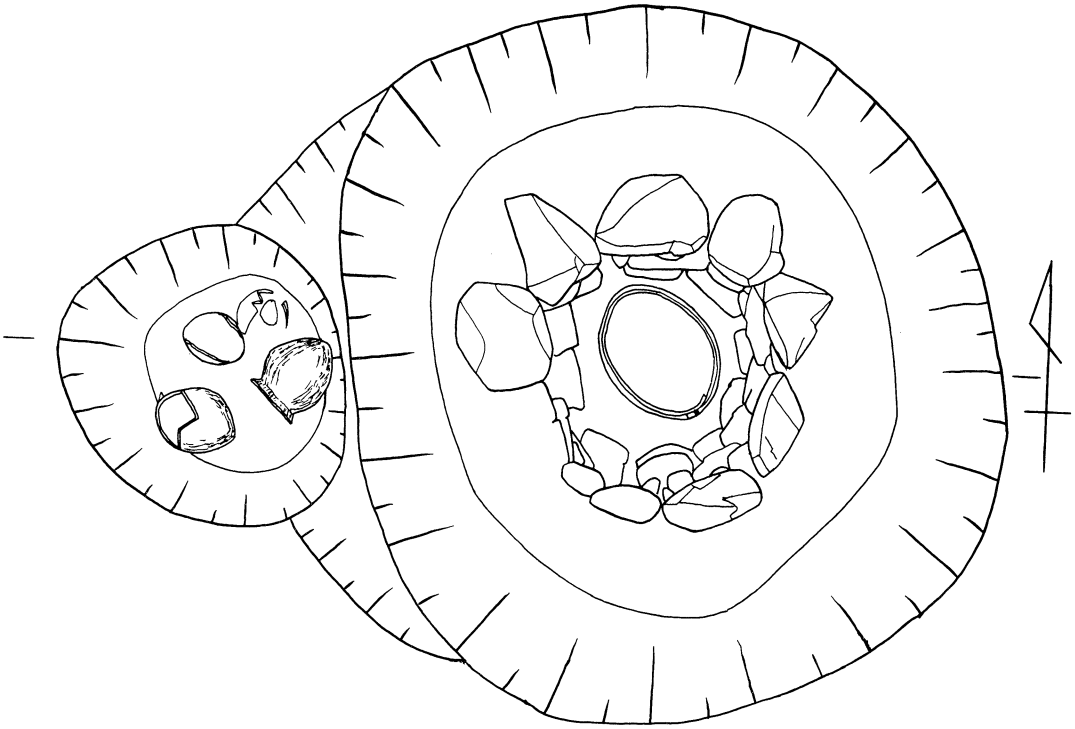
a. 井戸22（東から）

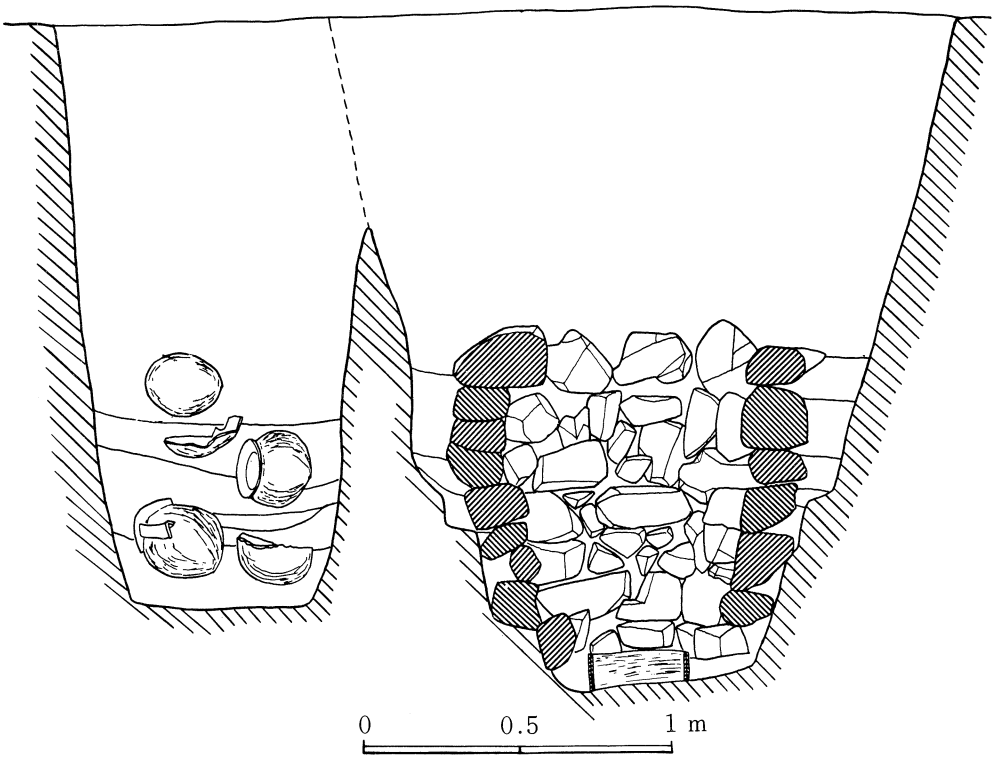
b. 井戸 6

井戸3平面図・立面図

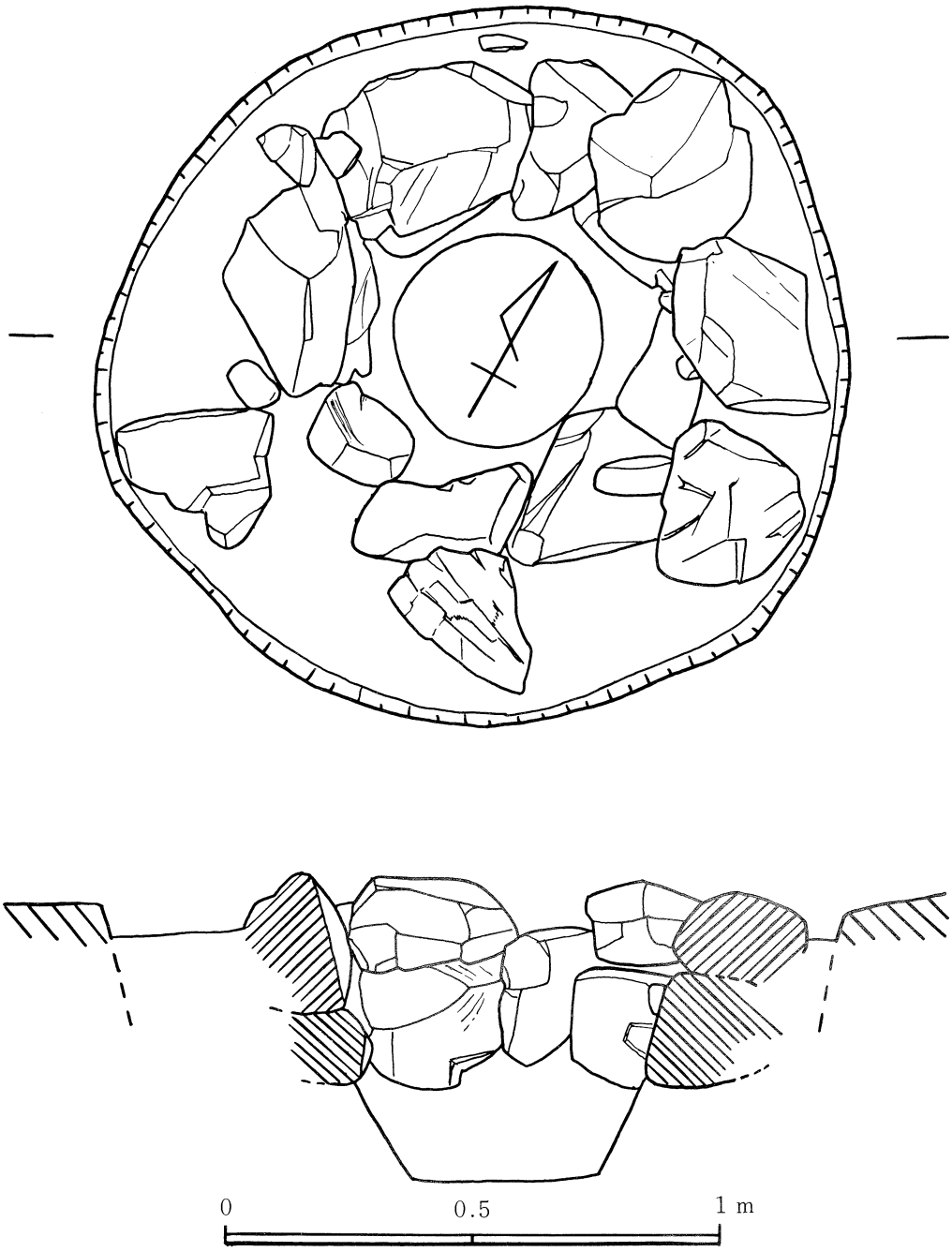


井戸7・8平面図・立面図

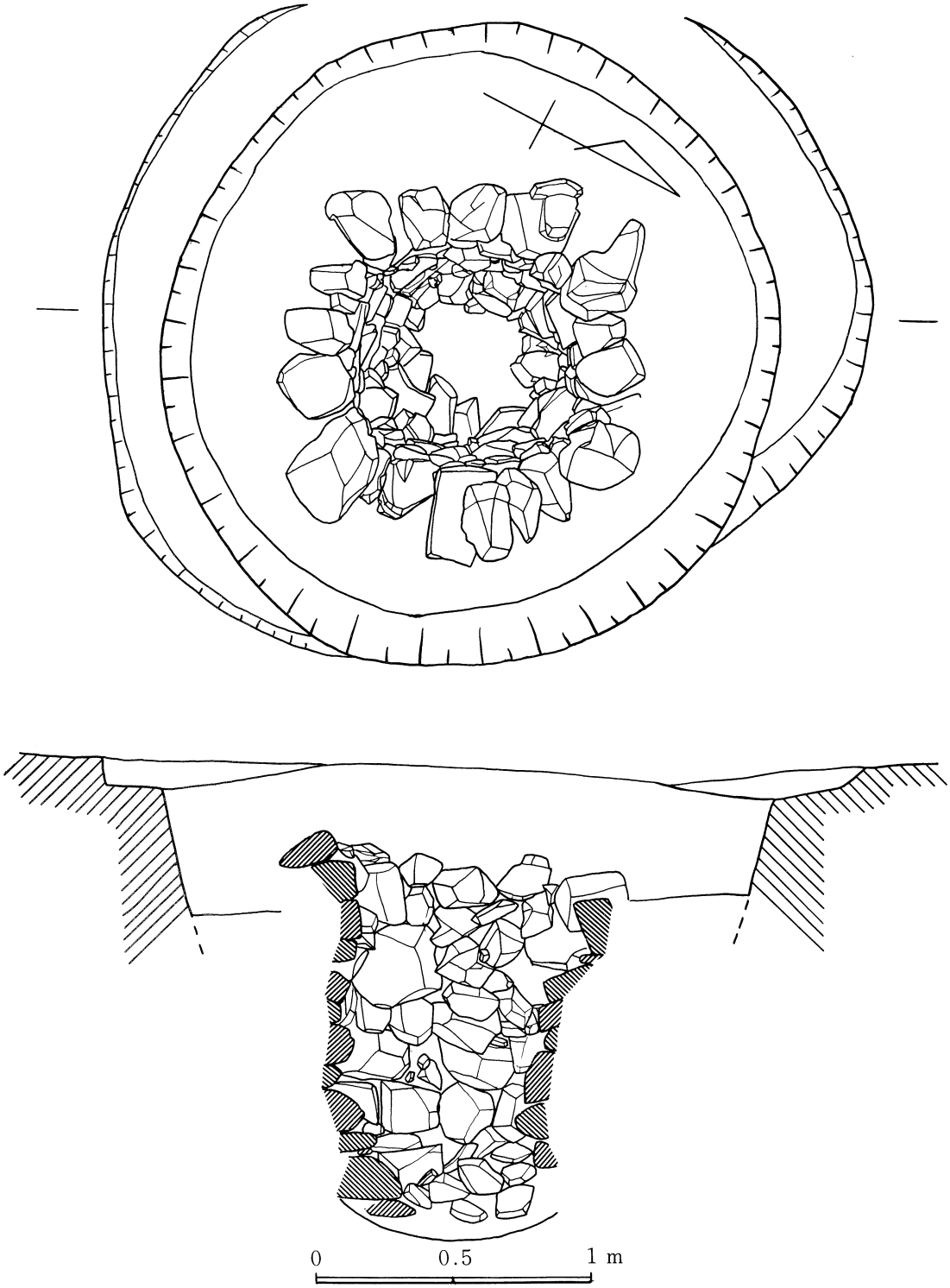




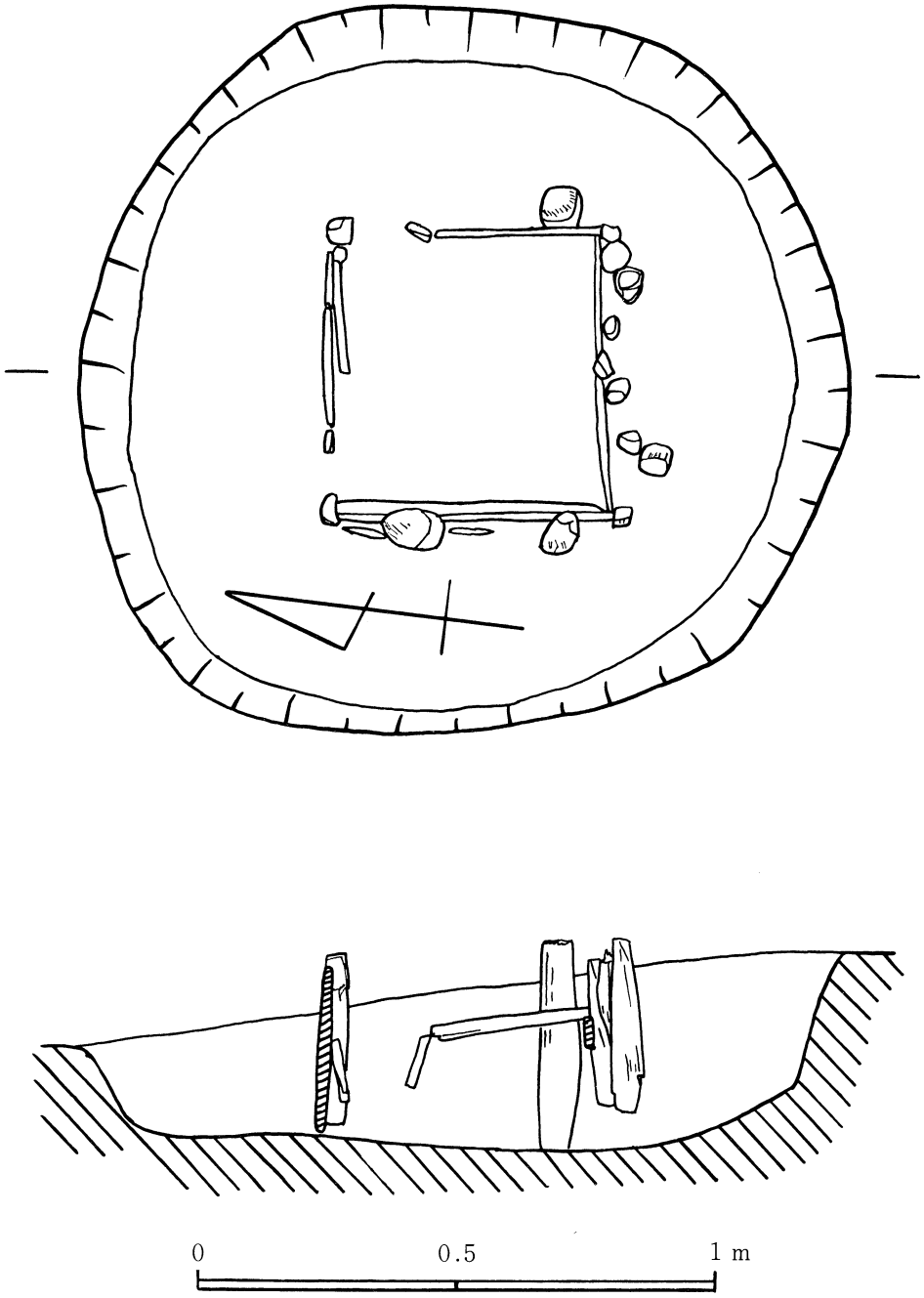
井戸9平面図・立面図



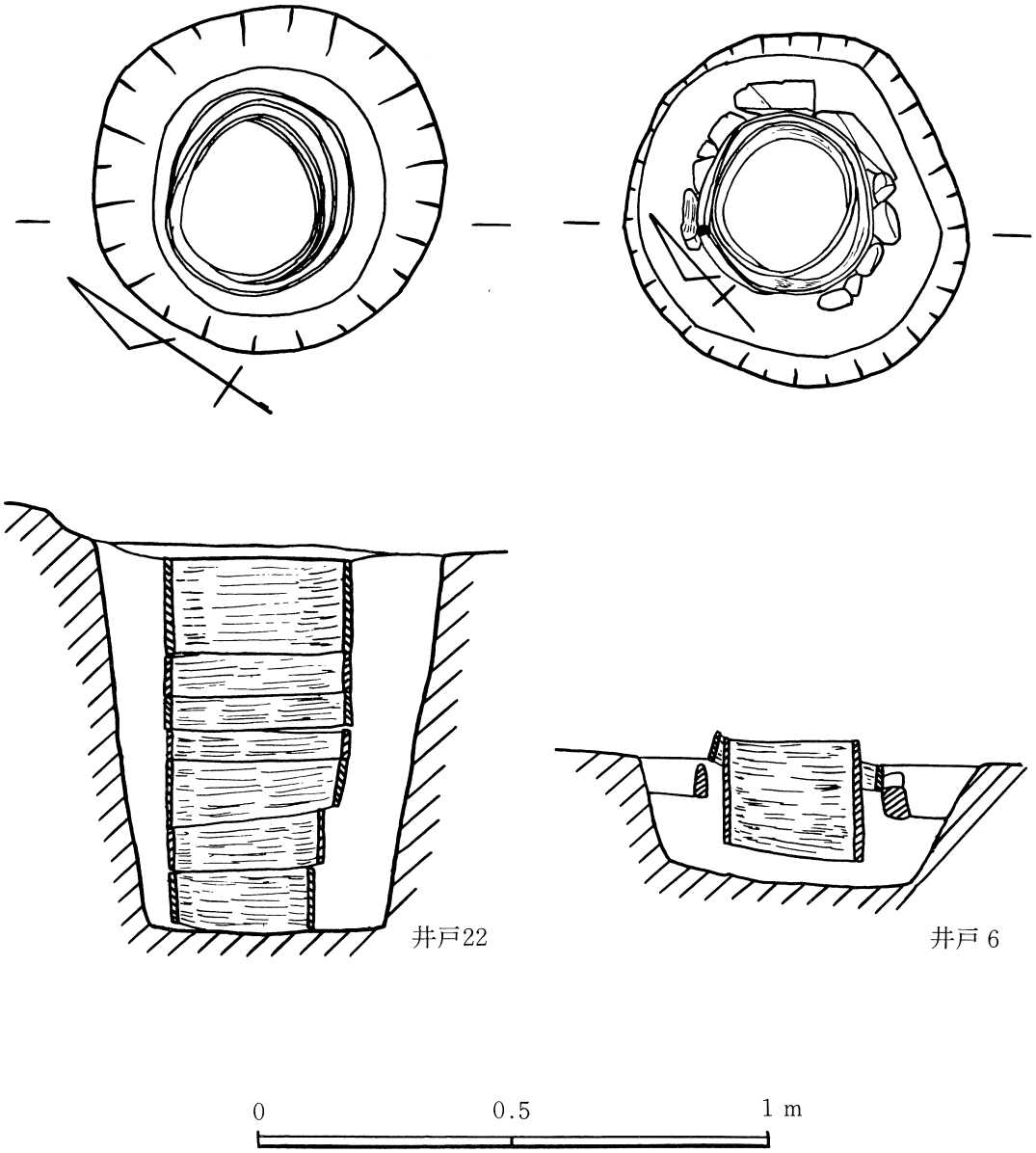
井戸4平面図・立面図



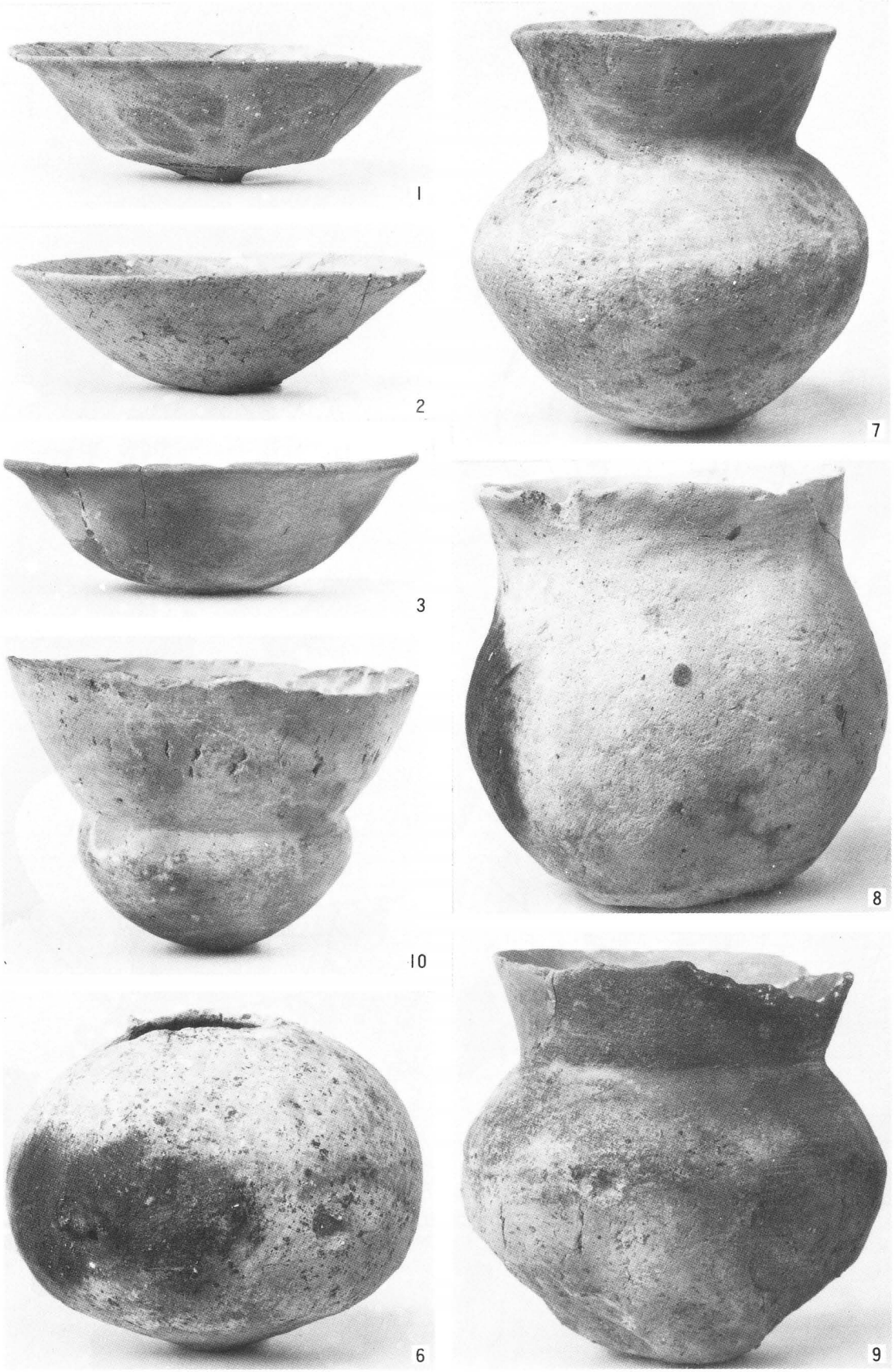
井戸25平面図・立面図



井戸6・22平面図・立面図



古式土師器



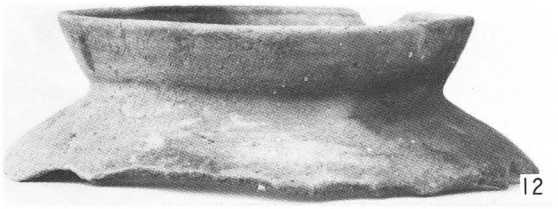
土師器高杯１～３，小型壺６～10

14

15

11

107


12

108

13

109

土師器甕11～15，須恵器蓋38～39，有蓋高杯40

瓦器埦・羽釜・青磁・燈明皿

17

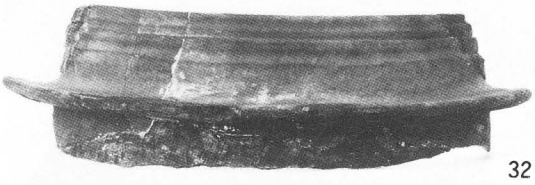
18

20

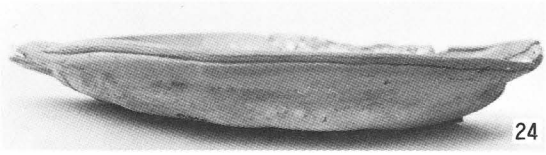
21

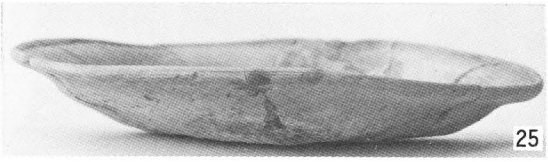
22

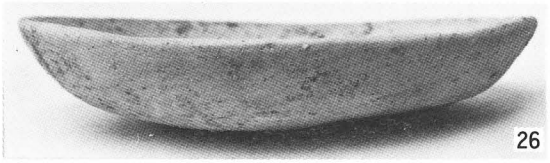
23

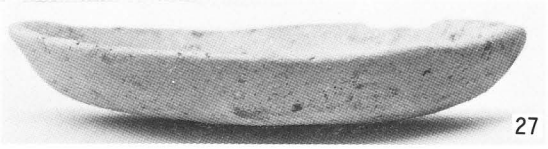

32

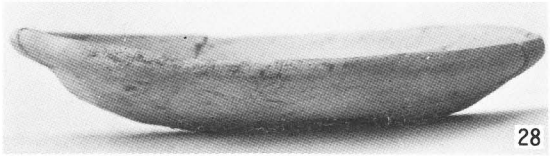
103

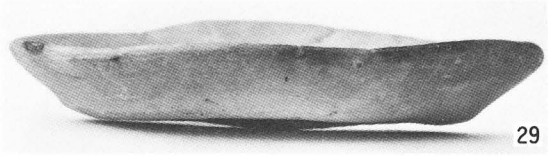

24

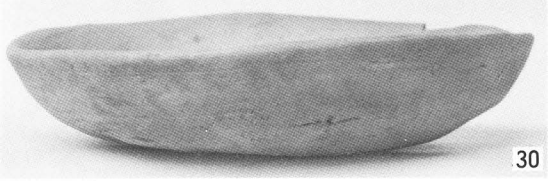

25


26


27


28

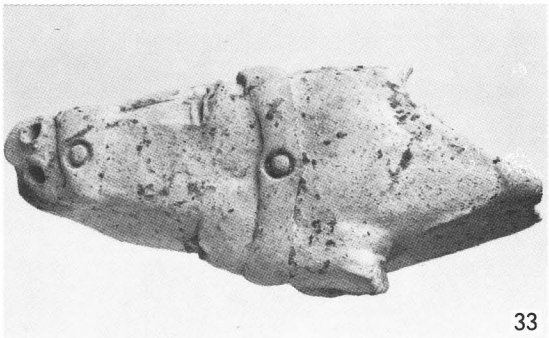

29

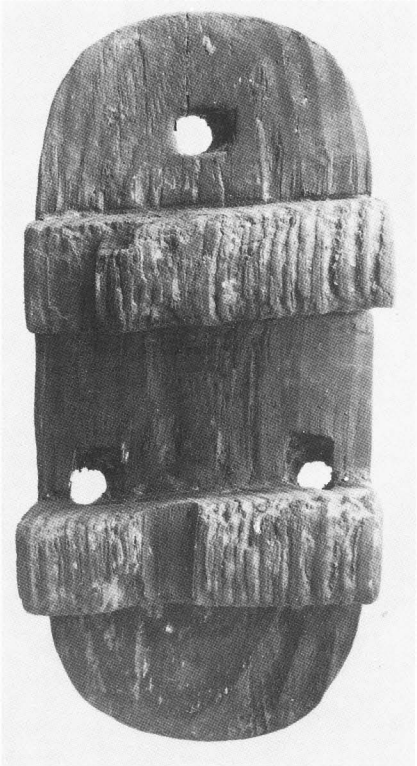

30

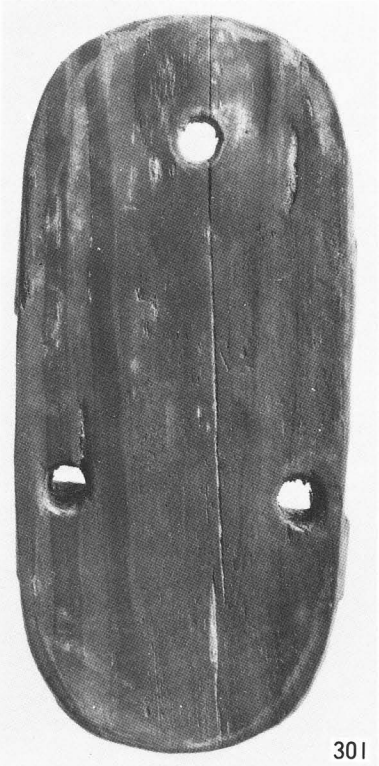
瓦器碗17～23，羽釜42，中国青磁34，土師器燈明皿25～31

土師器埦・土馬・下駄

31


33




301